令和５年度

へき地・複式教育

実践研究紀要

ふるさと山口に夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成

～様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成～

山口県へき地教育振興会

表紙の写真
　山口市立さくら小学校 「３・４年国語の学習（リーダー学習の様子)」

第５３回　山口県へき地・複式教育研究大会

周南市立三丘小学校

３・４年生授業

５・６年生授業

全体会

アトラクション

３・４年研究協議

５・６年研究協議

序　に　か　え　て

山口県へき地教育振興会
会　長　**伊　藤　和　貴**

令和５年度山口県へき地・複式教育実践研究紀要の刊行にあたり、一言御挨拶申し上げます。

平素から、各学校や地域において、へき地・複式教育の振興のために御尽力をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、我が国においては、少子化が急速に進展していく中で、全国的にみても多くの地域で学校の小規模化が急激に進行しており、本県におきましても同様の状況にございます。

このような中、現在、県内におけるへき地指定校及び複式学級を有する市町立小・中学校は１０３校で、全小中学校数の２５％にあたります。今後もこの割合はさらに増えることが予想される中で、山口県教育の発展のためには、へき地・複式教育の充実を図ってまいりますことが、より重要になってくるものと考えております。

山口県におきましては、すべての小・中学校に導入されているコミュニティ・スクールを核として、学校・家庭・地域が連携・協働し、社会総がかりでの教育を実現するため、「やまぐち型地域連携教育」の取組を推進し、子どもたちの豊かな成長につなげているところでございます。

こうした中、へき地指定校・複式学級においては、少人数学級といった強みを生かし、個に応じた指導及び家庭・地域との連携など、ふるさとへの誇りや愛着を育む活動に取り組む中で、子どもたち一人ひとりの良さをみつめ、引き出し、伸ばしていく教育を力強く進めているところでございます。

「山口県へき地・複式教育研究大会」は、そうしたへき地指定校・複式学級の特色を活かした授業展開の充実はもとより、山口県全体の教育振興をめざし実施されるものでございまして、今年度は11月に、周南市立三丘小学校において、複式授業の質の向上のため、様々なつながりから自分の考えを深める授業の在り方についての研究発表が行われたところでございます。

本年も県内各地から多くの先生方に御参加いただき、へき地・複式教育の一層の充実に向けた研究協議を深められたと伺っており、その成果を御自身の学校において実践されることにより、本県の教育がより一層充実していくよう期待しているところでございます。

本研究紀要を編集するにあたり、県内７つのへき地教育振興会の活動の概要や実践記録等を寄稿していただきました。山口県全体のへき地・複式教育のさらなる充実と発展につなげていくためにも、それぞれの実践を通して、地域の実情に応じた特色ある教育を推進し、その取組を互いに発信し合うことが大切であると考えております。

本会といたしましては、今後もへき地･複式教育の振興に努めてまいりますので、これからも御支援･御協力を賜りますようお願いいたします。

あ　い　さ　つ

山口県教育委員会
教育長　**繁　吉　健　志**

山口県へき地教育振興会におかれましては、県内へき地指定校及び複式学級を有する小規模校の教育の充実と活性化のために、平素から格別の御理解と御尽力をいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

県内のへき地・複式校において、本年度は、「ふるさと山口に夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成」～様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成～を研究主題に掲げ、ふるさとへの誇りや愛着を育む地域学習に取り組むとともに、子どもたち一人ひとりのよさをみつめ、引き出し、伸ばしていく教育に取り組んでこられました。

また、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」、新型コロナウイルス感染症の感染拡大など、先行き不透明な予測困難な時代の中にあっても、地域や学校の実情に応じ、１人１台タブレット端末などのＩＣＴ環境や少人数の学習集団の特性を生かして取り組まれた多様な実践及び創意ある活動の集大成として「令和５年度へき地・複式教育実践研究紀要」が刊行されますことに、深甚なる敬意を表します。

さて、学校教育では、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る、「令和の日本型学校教育」の実現が求められています。

また、現行の学習指導要領では、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、連携及び協働により、その実現を図っていくことが重要とされています。

このような国の動向等を踏まえ、山口県教育委員会では、本年度、新たな「山口県教育振興基本計画」を策定し、教育目標である「未来を拓くたくましい『やまぐちっ子』の育成」に向け、「確かな学力・豊かな心・健やかな体を育む教育の推進」「新たな時代を創造する人材を育む教育の推進」「誰一人取り残されることのない教育の推進」「学校・家庭・地域が連携・協働した教育の推進」「生涯を通じた学びの充実」「豊かな学びを支える教育環境の充実」の６つの柱に沿って、様々な施策を総合的・計画的に推進することとしています。へき地教育に関しては、郷土に誇りと愛着をもち、主体的に社会の形成に参画する人材を育成するために、市町教育委員会並びに山口県へき地教育振興会等と連携し、諸課題の解決に向けた実践的・累積的な研究とその成果の普及に向けた支援を行ってまいります。

こうした中、山口県へき地教育振興会において、地域の特性を生かした手づくりの教育活動の推進、多様な学習形態の工夫、一人ひとりのよさを発揮する児童生徒の育成に向けた実践を、本研究紀要にまとめて広く紹介されることは、本県教育の課題解決に迫る貴重な取組と考えております。

各学校には、引き続き、特色ある地域の学校づくりを進め、創意工夫しながら積極的な教育活動を展開する中で、児童生徒をはじめ、保護者や地域の期待に応える学校づくりに努めていただきますようお願いします。

結びに、山口県へき地教育振興会のますますの御発展を祈念し、本研究紀要刊行にあたってのあいさつといたします。

目　　次

序にかえて　山口県へき地教育振興会 会長　伊　藤　和　貴　様

あいさつ　山口県教育委員会 教育長　繁　吉　健　志　様

○ 各地区の研究活動概要と各学校研究課題

岩国地区 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
柳井地区 ・・・・・・・・・・・・・・ 3
周南地区 ・・・・・・・・・・・・・・ 5
防府地区 ・・・・・・・・・・・・・・ 7
厚狭地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
下関地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
萩地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

○ 実践記録

・つながりを大切にし　未来を切り拓いていく子どもの育成
　～学び合う学習集団づくりをめざして～
　岩国市立河内小学校 ・・・・・ 15

・関わり合いを通して　学ぶ楽しさを実感できる授業の創造
　～子どもと創る算数科の本質に迫る学年別指導～
　周防大島町立安下庄小学校 ・・・・・ 19

・主体的・対話的で深い学びを成立させる授業の展開
　～小規模校における自律的な学習展開をめざして～
　周南市立八代小学校 ・・・・・ 23

・主体的に学び、豊かに表現することができる児童生徒の育成
　～表現力を高める活動の充実を目指して～
　防府市立野島小・中学校 ・・・・・ 27

・かかわり合いを深め、ともに学び合う小野っ子の育成
　～子どもの学びを支援する少人数指導の創造～
　宇部市立小野小学校 ・・・・・ 31

・確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成
　～自力解決に向けた学習の進め方について～
　下関市立吉母小学校 ・・・・・ 35

・自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成（3年次）
　～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～
　阿武町立福賀小学校 ・・・・・ 39

○ 第53回山口県へき地・複式教育研究大会　令和5年11月17日（金）
研究主題　「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成」
　～対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫～
会場：周南市立三丘小学校 ・・・・・ 43

あとがき ・・・・・ 49
山口県へき地教育振興会 令和5年度役員一覧
山口県へき地・複式教育大会　表彰のお知らせ

令和５年度各地区の研究活動概要と各学校研究課題

岩国地区研究活動概要

岩国地域へき地教育振興会の該当１７校（小学校１６校、中学校１校）は、児童生徒の実態に即して、地域の特性や小規模校のよさを生かした特色ある教育活動を展開している。

１　岩国地域へき地教育振興会理事会　７名参加

(1) 期　　日　　令和５年５月１１日（木）１５：００～

(2) 会　　場　　岩国市役所　６１会議室

(3) 協議内容　　令和４年度事業報告及び決算報告

令和５年度役員選出、令和５年度事業計画及び予算案審議

２　岩国地域へき地・複式教育　夏季研修会　５６名参加

(1) 期　　日　　令和５年８月４日（金）１４：００～

(2) 会　　場　　岩国市周東支所　１Ｆ多目的ホール

(3) 研修内容　　研究協議 ＜テーマ別研究協議＞

①複式学級におけるめざす学習集団の姿

②めざす学習集団に近づけるための指導の工夫

・授業の中で　・学級づくりの中で　・地域連携を通して

指導講話

講師　やまぐち総合教育支援センター　研究指導主事　伊藤　悠樹　様

３　岩国地域へき地・複式教育　秋季研修会（岩国地域へき地教育振興会指定校発表会１年次）

９２名参加

(1) 期　　日　　令和５年１１月１５日（水）１３：２０～１６：２０

(2) 会　　場　　岩国市立河内小学校

(3) 研修内容

・公開授業　全学年　児童会活動　「河内小をもっとよくするための作戦④」

～もっときれいに、すごしやすい河内小にしよう～

授業者　上田 里美　大野 由紀子　生駒 光弘　福永 睦美

・研究主題　「つながりを大切にし、未来を切り拓いていく子どもの育成」

～　学び合う学習集団づくりをめざして　～

・研究発表　「学び合う学習集団づくりをめざして」（５・６年児童による発表含む）

・グループ協議

視点①「主体的な学びを育てる手だて」

視点②「自他を大切にする力の育成」

・指導講話

講師　やまぐち総合教育支援センター　研究指導主事　伊藤　悠樹　様

岩国地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	児童生徒数	研究主題
1	岩国市	小瀬小	複式	3	9	キャリア教育を柱とした小中一貫教育の推進 ～「12のキーワード」に示す資質・能力の育成をふまえた授業づくり～
2	岩国市	杭名小	複式	3	２６	つながりを大切にし、未来を切り拓いていく子どもの育成 ～学び合う学習集団づくりをめざして～
3	岩国市	河内小	複式	3	２５	つながりを大切にし、未来を切り拓いていく子どもの育成 ～学び合う学習集団づくりをめざして～
4	岩国市	柱野小	複式	2	１１	自ら考え学び、ともに高め合うコミュニケーション力をもつ子の育成 ～振り返りからつなげ、学びを深める授業づくりを通して～
5	岩国市	由西小	複式	2	9	主体的に自分の思いや考えを「伝え合う力」の育成 ～言葉豊かに自分の考えを表現し合うための指導の工夫～
6	岩国市	神東小	複式	2	9	主体的に自分の思いや考えを「伝え合う力」の育成 ～少人数・複式学級ならではのICTの効果的な活用の可能性を探る～
7	岩国市	そお小	複式	4	４４	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める児童・生徒の育成 ～自分の思いや考えを豊かに表現する力をのばすために～
8	岩国市	川上小	複式	2	6	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める児童・生徒の育成 ～自分の思いや考えを豊かに表現する力をのばすために～
9	岩国市	米川小	複式	4	３５	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める児童・生徒の育成 ～自分の思いや考えを豊かに表現する力をのばすために～
10	岩国市	修成小	複式	3	１５	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める児童・生徒の育成 ～自分の思いや考えを豊かに表現する力をのばすために～
11	岩国市	周北小	複式	2	5	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める児童・生徒の育成 ～自分の思いや考えを豊かに表現する力をのばすために～
12	岩国市	本郷小	１級	3	２１	自ら学び、伝え合う児童生徒を育むための授業づくり
13	岩国市	錦清流小	複式	5	４６	主体的・対話的で深い学びを成立させる複式学級の展開 ～考えを深め、自律的に学習できる子を目指して～
14	岩国市	宇佐川小	２級	1	2	個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた 教師の支援とICTの効果的な活用
15	岩国市	美和東小	複式	5	４８	すべての児童生徒が意欲的に取り組み、 基礎基本を身に付ける授業づくり ～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを通して～
16	岩国市	美和西小	複式	4	４５	すべての児童生徒が意欲的に取り組み、 基礎基本を身に付ける授業づくり
17	岩国市	本郷中	１級	3	9	自ら学び、伝え合う児童生徒を育むための授業づくり

※ 学級数は特別支援学級を除く。児童数・生徒数は令和５年５月１日現在

柳井地区研究活動概要

令和５年度柳井地区へき地・複式教育振興会は、小学校１５校で組織されている。

「ふるさとに誇りをもち、主体的・協働的に学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」を研究主題に掲げ、各校それぞれの創意と工夫により、その解明に向け日々の研究実践を行っている。

１　活動の概要

(1)　総　会

①　期日・会場　　令和５年４月２１日（金）　柳井総合庁舎

②　議　　題　　令和４年度事業報告・決算報告・監査報告
令和５年度役員選出・事業計画・予算案

(2)　第１回理事会

①　期日・会場　　令和５年４月２１日（金）　柳井総合庁舎（総会終了後）

②　議　　題　　県へき振興会役員選出　県へき役員会について　研究集録

(3)　第２回理事会

①　期日・会場　　令和６年２月５日（月）予定　柳井市役所

②　議　　題　　県へき理事会等復伝　柳井地区授業研究会　成果普及について協議
本年度事業の反省　次年度計画

(4)　令和５年度柳井地区へき地・複式教育振興会授業研究会

(5)　令和５年度研究成果普及（研究指定校の研究資料を柳井地区へき地・複式校を有する全小学校及び市町教育委員会に配付）

２　授業研究会の概要

(1)　期　　日　　令和５年１１月２８日（火）

(2)　会　　場　　周防大島町立安下庄小学校（校長　中村　広幸）

(3)　研究主題　　関わり合いを通して　学ぶ楽しさを実感できる授業の創造
～子どもと創る算数科の本質に迫る学年別指導～

(4)　内　　容

①　公開授業

教科等	学年　・　単元名	授業者	会場
算数科	１年：かたちあそび ２年：はこの形　～はこの形をしらべよう～	松浦　裕美	１・２年教室
算数科	３年：重さ　～ものの重さをはかろう～ ４年：面積　～広さを表そう～	安本　幹雄	３・４年教室
算数科	５年：割合　～比べ方を考えよう～ ６年：資料の調べ方　～だまされない資料の見方～	大田　美樹	５・６年教室
算数科	なかよし（６年）： およその面積と体積を考えよう	竹田　一博	なかよし教室

②　研究協議

部会	指導助言者	司会者	会場
１・２年	山口大学教育学部附属光小学校 教　諭　　山本　東建　様	周防大島町教育委員会 指導主事　松岡　裕美	１・２年多目的
３・４年	やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事　伊藤　悠樹　様	周防大島町教育委員会 指導主事　白地　　太	３・４年多目的
５・６年	山口大学教育学部附属山口小学校 教　諭　　林　　絵梨　様	柳井市教育委員会 指導主事　作花　麗美	外国語教室
なかよし	周防大島町立島中小学校 地域コーディネーター　古澤　佳美　様	上関町教育委員会 指導主事　石田　陽子	５・６年多目的

柳井地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市　町	学校名	級地別	学級数	研　究　課　題
			児童数		
1	柳　井　市	日積小	複	5	ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成 ～学びをつなぎ、つむぎ、知を拓く授業の創造～
			25		
2	〃	柳北小	複	7	「考え、議論する道徳」の授業の創造 ～相手の気持ちを考えた優しい言葉がけができ、正しい行いをしようと努力する子の育成～
			57		
3	〃	余田小	複	6	自ら考え判断し、他者と共によりよく生きる児童の育成 ～主体的・対話的で深い学びを目指し、ＩＣＴを活用した授業のあり方～
			54		
4	〃	伊陸小	複	5	問いをもち、かかわり合いを通して学びを深め、自ら表現できる児童の育成 ～算数科の授業づくりを通して～
			37		
5	〃	平郡東小	4	1	ふるさとを愛し、学びを楽しむ平郡っ子の育成 ～地域とのかかわりあいや、交流学習での学び合いを通して～
			1		
6	〃	柳井南小	複	6	わかる、できる、好きになる授業を目指して ～学び合い、思考を深めるための算数科授業の工夫～
			51		
7	〃	小田小	複	6	主体的に学習に臨むことができる児童の育成 ～協働的に学び合える授業づくり～
			42		
8	周防大島町	三蒲小	複	4	「見守り型支援」を核とした学びの自立を目指す学習指導の工夫
			22		
9	〃	沖浦小	複	5	主体的に学び、自分の思いを表現する力の育成 ～話す、聞く力を伸ばす話し合い活動を通して～
			18		
10	〃	島中小	複	5	「聞き合える」児童の育成を目指して ～子どもの側に立った話し合いの方法知の獲得支援を中心に～
			21		
11	〃	浮島小	3	3	離島・極小規模校における主体的・対話的で深い学びの実現 ～ICTや地域教材の有効な活用を重視して～
			9		
12	〃	安下庄小	複	4	関わり合いを通して　学ぶ楽しさを実感できる授業の創造 ～子どもと創る算数科の本質に迫る学年別指導～
			33		
13	上　関　町	祝島小	4	1	地域の教育資源を活用した活動の工夫 ～極小規模校における効果的な地域連携活動のあり方～
			2		
14	田布施町	城南小	複	9	学ぶことを楽しみ、確かな学力を身に付ける児童の育成 ～児童が主体的に活動し、かかわり合いながら学びを深める授業の工夫～
			57		
15	平　生　町	佐賀小	複	7	主体的・対話的で深い学びのある授業づくり ～金銭教育を通して～
			54		

周南地区研究活動概要

令和５年度周南地区小規模校教育振興会は、周南地区小学校１１校で組織されている。

「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成～対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫～」を研究主題に掲げ、各学校が地域や学校のよさを生かしながら、研究実践を進めている。

１　周南地区小規模校教育振興会総会並びに理事会

（1）総会

①期　日　令和５年４月２５日（火）１４：００～１４：５０

②内　容　前年度事業決算報告、本年度役員改選、事業計画、予算審議

（2）第１回理事会

①期　日　令和５年４月２５日（火）１５：００～１５：４０

②内　容　周南地区小規模校教育振興会研修会の内容と運営について

（3）第２回理事会

①期　日　令和６年２月（予定）

②内　容　本年度事業の反省、次年度事業計画等

２　令和５年度周南地区小規模校教育振興会研修会

第５３回山口県へき地・複式教育研究大会

（1）期　　日　令和５年１１月１７日（金）

（2）会　　場　周南市立三丘小学校

（3）研究主題　「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成」
～対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫～

（4）内　　容

①公開授業

学年	教科	教材名	指導者
３・４年	国語	３年　モチモチの木 ４年　ごんぎつね	大久保　美季
５・６年	国語	５年　和の文化を受けつぐ ６年　町の幸福論	渡邊　　聡

②アトラクション　人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門　順礼歌の段」（５・６年児童）

③開会行事・全体会

④分科会・指導助言

学年	教科	指導助言者
３・４年	国語	岩国市立錦清流小学校　教頭　片山　博登　様
５・６年	国語	岩国市立由西小学校　教諭　小嶋　三保子　様

周南地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	研究課題
			児童生徒数		
1	下松市	豊井小	複	6	自ら考え、ともに学び続ける子どもの育成 ～豊井型少人数・複式の授業づくりを通して～
			52		
2	光市	塩田小	複	4	自ら考え、表現し、学び合う児童の育成 ～ステップ学習・リーダー学習をとおして～
			16		
3	光市	束荷小	複	4	学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成 ～複式学習で主体性を育む具体的な手立て～
			19		
4	光市	周防小	複	7	主体的に学びを創造する児童の育成 ～算数科における見方・考え方の充実を目指して（１年次）～
			58		
5	周南市	湯野小	複	6	伝え合い、深め合う児童の育成 ～小規模校の特性を生かした授業づくり～
			27		
6	周南市	須磨小	2	1	「わかった」「できた」に喜びを感じ、自ら学ぶ児童の育成 ～基礎的・基本的な力の定着を目指して～
			2		
7	周南市	鼓南小	複	3	主体的に学びを進め、学び続ける子どもの育成 ～個々のよさを生かし、表現力を伸ばす取り組み～
			9		
8	周南市	和田小	1	3	『自分の思い・考えを表現できる授業の創造 ～３C（communication,control,collaboration）能力の育成～』
			16		
9	周南市	三丘小	複	5	「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成」 ～対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫～
			39		
10	周南市	八代小	複	4	主体的・対話的で深い学びを成立させる授業の展開 ～小規模校における自律的な学習展開をめざして～
			15		
11	周南市	鹿野小	複	7	学力向上のための読解力及び表現力の育成 ～インプットとアウトプットの一体化～
			49		

防府地区研究活動概要

防府地区へき地・複式教育振興会は、小学校１０校、中学校１校の１１校（小中学校が１校）で活動している。本地区では研究主題を「へき地・複式校の特色を生かした教育活動の充実」とし、きめ細かな指導による学力の向上、社会性や表現力の育成、豊かな体験による豊かな心の育成等、各学校が地域の特色を生かしながら、様々な工夫により、その具現化に努めているところである。

１　防府地区へき地・複式教育振興会理事会・拡大役員会

(1)　期　　日　　令和５年６月１日（木）

(2)　場　　所　　大内地域交流センター

(3)　協議内容　　・令和４年度事業報告及び決算報告

・令和５年度役員選出

・令和５年度事業計画及び予算案審議

・令和５年度防府地区へき地・複式教育振興会研修会の開催について

・各校の情報交換

２　防府地区へき地・複式教育振興会研修会

(1)　期　　日　　令和５年９月２６日（火）

(2)　場　　所　　防府市立野島小・中学校

(3)　研修内容

○研究実践発表

［発表校］　防府市立野島小・中学校

［内　容］　主体的に学び、豊かに表現することができる児童生徒の育成

～表現力を高める活動の充実を目指して～

○公開授業

①理科　授業者　福本　耕一　教諭　［小学校６年：月の形と太陽］

②社会　授業者　大谷　裕万　教諭　［中学校１年：地理的分野　世界の諸地域　アジア州］

③理科　授業者　林　　隆一　教諭　［中学校２年：動物の体のつくりとはたらき（呼吸）］

④数学　授業者　北山　　晃　教諭　［中学校３年：二次方程式の利用］

○講演

木谷 秀勝　様［山口大学教育学部附属教育実践総合センター　教授］

防府地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	児童生徒数	研究課題
1	山口市	島地小	複	3	20	楽しく学び、確かな学力と学び方を身につける児童の育成（１年次） ～楽しく学べる授業作りの研究を通して～
2	山口市	串小	2	1	3	主体的に学び、豊かに思いを表現する児童の育成 ～表現力を高める学習指導の工夫～
3	山口市	八坂小	複	4	18	自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童の育成（２年次） ～児童の学習意欲を喚起する教育活動を通して～
4	山口市	柚野木小	2	1	2	コミュニケーション能力の向上をめざして ～ひと・もの・こと　との真の関わりを通して～
5	山口市	生雲小	複	4	20	自分の思いや考えを明確にもち、お互いに伝え合う子どもの育成 ～つながりを大切にした授業づくりを通して～
6	山口市	さくら小	複	5	33	対話を通した　深い学び合いをめざして
7	山口市	名田島小	複	7	35	問いを見付け、学びを語れる子どもの育成 ～複式授業においても学びを深める教師の働きかけのあり方～
8	山口市	徳佐小	複	5	26	ともに学ぶよさを楽しみ、互いに力を伸ばす児童の育成　（１年次） ～児童が自ら学習を進めていくための学習展開の工夫～
9	防府市	野島小･中	3	4	7	主体的に学び、豊かに表現することができる児童生徒の育成 ～表現力を高める活動の充実を目指して～
10	防府市	向島小	複	5	26	自ら学び、考え、表現することのできる児童の育成 ～効果的な複式・少人数学習指導の在り方～

厚狭地区研究活動概要

厚狭地区の研究主題は今年度「複式・小規模校の特性を生かした教育活動の工夫（５年次）」と設定し、会員校では各学校独自の研究主題の解明に向け研究実践を展開している。

厚狭地区へき地・複式教育研修会では、複式教育に携わる関係教職員が、当面する諸問題について協議するとともに､他校の取組状況を参考に問題解決への具体的方策を究明することにより、厚狭地区のへき地・複式教育の一層の深化・充実を図る。

１　第１回厚狭地区へき地・複式教育振興会役員会

（１）期日・会場　令和５年５月２３日（火）　宇部市総合福祉会館
（２）協 議 内 容　令和５年度の組織・事業計画・研修計画・予算案　等

２　厚狭地区へき地・複式教育研修会

（１）期日・会場　令和５年１０月２６日（木）　宇部市立小野小学校
（２）研 修 内 容
小野小学校研究主題　「かかわり合いを深め、ともに学び合う小野っ子の育成」
～子どもの学びを支援する少人数指導の創造～

①　公開授業

学年	教　科	単　元　名	指　導　者
１・２年	算数科	１年　「たしたりひいたりしてみよう」 ２年　「かけ算（２）」	教諭　菅野　弥生
３・４年	算数科	３年　「小数」 ４年　「小数」	教諭　大谷　奈央
５・６年	国語科	５年　「たずねびと」 ６年　「やまなし」「イーハトーヴの夢」	教諭　鈴川　和男

②　開会行事
厚狭地区へき地・複式教育振興会会長挨拶　宇部市教育委員会　教育長　野口　政吾

③　研究協議
小野小学校による研究の概要説明、グループ別協議、協議内容発表

④　指導講話　［指導者］　宇部市立黒石小学校　教頭　杉山　夕子　様
３学級の公開授業から、複式学級においてＩＣＴを必要な時に効果的に活用した学び合いのある授業づくりや、低・中・高学年それぞれの段階に応じた支援体制（小野小スタイル）による学び方の価値について講話があった。授業の中で子どもが学びを自分のものとしており、「わたり」や「ずらし」などの支援を超えた精選された支援について授業者の自評や協議の様子を踏まえて価値付けがあった。また、「小野小スタイル」を続けていくために、次年度を意識した隣学年のペアリングなど、組織としてどのように仕組んでいけばよいか示唆をいただいた。

⑤　閉会行事
会場校校長挨拶　宇部市立小野小学校　校長　菊池　直樹

厚狭地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	児童生徒数	研究課題
1	宇部市	二俣瀬小	複	3	21	主体的・協働的に学ぶ子どもの育成 ～二俣瀬スタイルの複式授業づくり～
2	宇部市	小野小	複	4	21	かかわり合いを深め、ともに学び合う小野っ子の育成 ～子どもの学びを支援する少人数指導の創造～
3	宇部市	吉部小	複	4	24	【楠で育てる９年間の「学び」と「育ち」】 コミュニケーションを大切にし、主体的に学び合う児童の育成 ～きく力と伝える力の向上をめざして～
4	宇部市	万倉小	複	4	33	【楠で育てる９年間の「学び」と「育ち」】 主体的に学ぶ児童の育成 ～伝え合う力を高める指導の工夫～
5	山陽小野田市	厚陽小	複	6	54	心を磨き，自ら向上していこうとする児童生徒の育成 ― 次につながるふり返りを視点に入れて ―
6	美祢市	厚保小	複	6	37	「ねがい」をもち、主体的な学びによってそれを叶えていこうとする子どもの育成 ～単元構成の工夫や学習集団の形成を通して～
7	美祢市	麦川小	複	3	12	ともに高め合い主体的に学ぶ児童の育成 ～児童の実態に応じた学習の場の工夫～
8	美祢市	於福小	複	3	24	対話による表現力を高め、主体的に学び続ける児童の育成 ～聴く力・伝える力を高める～
9	美祢市	豊田前小	複	4	20	生き生きと学び続ける児童の育成 ～課題を解決するための主体的・対話的な学習を通して～
10	美祢市	綾木小	複	3	16	夢中になって学ぶ子どもの姿を求めて ～複式学級における期待感と達成感のある授業づくりを通して～
11	美祢市	淳美小	複	5	47	夢中になって学ぶ子どもの姿を求めて ～学ぶプロセスを明確にし、結果を追求する授業づくり～
12	美祢市	秋吉小	複	6	53	思いや考えをもち、主体的に学ぶ子どもの育成 ～ICTの効果的な活用を通して～
13	美祢市	秋芳桂花小	複	6	53	主体的に学び、思いを伝え合う児童の育成 ～対話を通して学びを深める授業づくり～

下関地区研究活動概要

平成１１年度から「豊関地区へき地及び複式学級・少人数学級を有する学校の学校経営、学習指導及び生徒指導上の諸問題について研究協議をすることにより、小規模校教育の深化・充実を図る」ことを趣旨に取り組んでいる。平成１７年２月に下関市と豊浦郡が合併したことにより、平成１７年度から「下関市へき地・複式教育振興会」と名称を変更した。

平成１９年度から、関係教職員の資質のさらなる向上を図ることを目的に、主要事業である「下関市へき地・複式教育研究発表会」の名称を「下関市へき地・複式教育研究協議会」と変更し、内容も公開授業と研究協議に力点を置いた研修会とした。

１　第１回下関市へき地・複式教育振興会理事会〔令和５年４月２４日（月)〕（１６名）

（１）令和５年度役員の承認について
（２）令和４年度会計決算報告及び監査報告について
（３）令和５年度事業計画について
（４）令和５年度会計予算案について

２　第２回下関市へき地・複式教育振興会理事会〔令和６年２月６日（火）予定〕（１７名予定）

（１）令和５年度活動内容報告及び反省
（２）令和６年度下関市へき地・複式教育振興会事業計画案について

３　令和５年度下関市へき地・複式教育研究協議会の概要

（１）期　　日　　令和５年１０月２０日（金）
（２）会　　場　　下関市立吉母小学校
（３）研究主題　　確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成
～自力解決に向けた学習の進め方について～
（４）日程・内容

①　公開授業

学年	教科	単元名	授業者	会場
１・２年	算数科	１年「かたちづくり」 ２年「三角形と四角形」	岩貞　太祐	１・２年教室
３年	算数科	３年「円と球」	坪井　真起	３年教室
６年	算数科	６年「図形の拡大と縮小」	乾　　朋浩	６年教室

②　学校映像紹介

③　開会行事・会長挨拶　　下関市へき地・複式教育振興会　会長　磯部　芳規
会場校校長挨拶　　下関市立吉母小学校　校長　亥川　竜太郎

④　研究の取組紹介　　発表者　下関市立吉母小学校　　教諭　坪井　真起

⑤　研究協議　　協議テーマ：自力解決に向けた学習の進め方について
（視点１）めあては振り返りを意識し工夫したものであったか
（視点２）児童が見通しをもち自力で解決するための支援が行われていたか

⑥　指導講話　　指導者　宇部市立黒石小学校　　教頭　杉山　夕子　様

⑦　閉会行事　会場校校長挨拶　下関市立吉母小学校　校長　亥川　竜太郎

下関地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

	学校名	級地別	学級数	研　究　課　題
		児童数		
1	関西小	複	6	自ら問いをもち意欲的に学ぶ子供の育成をめざして ～情報を読み解く力を高める手立ての工夫～
		４３		
2	本村小	複	7	進んで学ぶ子を育てる ～小中一貫教育の充実に向けて～
		４８		
3	吉母小	複	3	確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成 ～自力解決に向けた学習の進め方について～
		5		
4	蓋井小中	４級地	小：２ 中：１	自ら探求し、学び続けるふたおいっ子の育成 ～主体的に学ぶ力の育成を柱とした個の学びの充実を通して～
		児童：4、生徒：1		
5	吉田小	複	4	情報を読み取り、主体的に学習を進めていく子どもの育成 ～複式授業における学び手を育成する授業を目指して～
		３７		
6	内日小	複	3	自分の考えを広げ、深める児童の育成 ～学び合いのある授業づくりを通して～
		１２		
7	楢崎小	複	5	基礎基本の力をもとに、「わかる」「できる」を実感する子供の育成 ～思考し、学び合う力を育てる指導の工夫（算数科を中心に）～
		３８		
8	豊田下小	複	5	生き生きと活動し、主体的に学ぶ児童の育成 ～見通しを持って、みんなで学び深める授業を目指して～
		４１		
9	室津小	複	3	主体的に学び、学びを楽しむ子どもの育成 ～自分の考えを持ち、対話を通して深い学びとなる複式指導の工夫～
		２８		
10	小串小	複	4	学びに向かい、確かな学力を身につける子どもの育成 ～児童が自ら学習を進めていくための学習展開の工夫～
		２３		
11	宇賀小	複	4	友達と関わりながら、主体的に学び合う宇賀っ子の育成 ～思いや考えを広げる・深める対話的な授業の創造～
		２７		
12	内日中	複	4	個が伸びる学習指導と授業改善 ～個に応じた学習指導と説明する力を伸ばす授業づくり～
		１３		

萩地区研究活動概要

令和５年度の萩地区へき地・複式教育振興会の対象校は、小学校１９校、中学校４校の計２３校である。各校が地域の特性や小規模のよさを生かしながら、新学習指導要領に基づいた、新しいへき地・複式教育のあり方の研究実践を展開している。

１ 令和５年度萩地区へき地・複式教育振興会理事会

（１） 期　日　　令和５年４月２８日（金）午後１時３０分から午後２時３０分
（２） 会　場　　萩市教育委員会　第３会議室
（３） 内　容　　ア　令和４年度事業報告・決算報告・監査報告
イ　令和５度役員選出
ウ　令和５年度事業計画案・予算案審議
エ　諸連絡

２　令和５年度　萩地区へき地・複式教育振興会研究大会
萩・阿武小学校教育研究会へき地・複式教育部会合同開催

（１） 期　日　　令和５年１１月２日（木）午後１時３０分から午後４時３０分
（２） 会　場　　阿武町立福賀小学校　４３名参加(会場校教職員を含む)
（３） 内　容　　【研究主題】
「自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成」
～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～

（４） 日　程

① 研究授業

学年	教科等	単元名等	指導者	場所
２・３年	算数科	２年　かけ算（２）	清水　学	２・３年教室
		３年　かけ算の筆算（１）		
５・６年	国語科	５年　「固有種が教えてくれること」	三輪美咲	５・６年教室
		６年　「鳥獣戯画」を読む		

① ｱﾄﾗｸｼｮﾝ　児童によるふるさと太鼓
② 開会行事
③ 研究発表
④ 分科会　　部会別ワークショップ型協議（国語：集会室、算数：音楽室）
⑤ 指導助言　《国語科》山口県教育委員会義務教育課指導班
指導主事　　住江めぐみ　様
《算数科》下松市教育委員会学校教育課
指導主事　　小倉　好勝　様
⑥ 閉会行事

萩地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町村	学校名	級地別	学級数	児童生徒数	研究課題
1	萩市	越ヶ浜小	複式	5	41	主体的に学び、成長する児童・生徒の育成 ～小・中一貫教育による学力向上への取組を通して～
2	〃	三見小	複式	2	13	自分の思いや考えを表現し、学びを深め合う児童生徒の育成 ～主体的に学び、「確かな学力」を身に付けるための授業の工夫～
3	〃	大井小	複式	2	17	伝え合い、深め合う授業づくり ～成長が実感できる「振り返り」を通して～
4	〃	大島小	2	3	12	ICT環境を活用して主体的に学習を深める児童生徒の育成（3年次） ～1人1台の端末を効果的に使った学習活動を通して～
5	〃	見島小	4	2	5	夢の実現に向けて自ら問題解決に取り組む見島っ子の育成（1年次） ～ICT機器を活用した思考力・判断力を育む学習の実現～
6	〃	川上小	複式	4	16	主体的・対話的で深い学びを実現する児童・生徒の育成 ～個別最適な学びと協働的な学びに焦点を当てて～
7	〃	小川小	2	3	15	自他の思いや考えを大切にし、自ら進んで学び続ける児童生徒の育成 ～聞き合う活動を通して、自分の考えを深める授業づくり～
8	〃	むつみ小	1	5	26	主体的・対話的で深い学びをめざした教育活動の実践 ～「伝え合う力」を高める取組を通して～
9	〃	明木小	複式	3	17	自他のよさや違いを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童生徒の育成 ～人権を尊重した学び合い・関わり合いを通して～
10	〃	佐々並小	複式	4	13	自他のよさや違いを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童の育成 ～人権を尊重した学び合い・関わり合いを通して～
11	〃	育英小	複式	5	45	自分で考え、表現できる子どもの育成 ～複式学習（少人数）を生かした国語科の授業づくりを通して～
12	〃	多磨小	複式	7	44	自他の思いや考えを大切にし、自ら進んで学び続ける児童生徒の育成 ～考えを深める「対話」につなげる指導の充実をめざして～
13	〃	福栄小	複式	6	34	豊かな心を育む道徳教育 ～心を耕すための指導の工夫（2年次）～
14	〃	大島中	2	3	17	ICT環境を活用して主体的に学習を深める児童生徒の育成（3年次） ～1人1台の端末を効果的に使った学習活動を通して～
15	〃	見島中	4	1	3	夢の実現に向けて自ら問題解決に取り組む見島っ子の育成（1年次） ～ICT機器を活用した思考力・判断力を育む学習の実現～
16	〃	むつみ中	2	3	17	主体的・対話的で深い学びをめざした教育活動の実践 ～「伝え合う力」を高める取組を通して～
17	〃	川上中	複式	1	6	主体的・対話的で深い学びを実現する児童・生徒の育成
18	長門市	通小	複式	2	10	主体的に学び、仲間と共に高め合う児童の育成 ～小規模校のよさを生かした授業づくりの工夫～
19	〃	俵山小	複式	6	25	主体的・対話的な学びを支援する授業の創造 ～「聞く」から「聴く」へ、「伝える」から「伝え合う」へ～
20	〃	神田小	複式	2	8	一人一人のちがいを認め、主体的に学び合う子どもをめざして ～話す・聞く・まとめる力を向上させる手立て～
21	〃	向津具小	1	4	12	主体的に学ぶ子どもの育成 ～言葉による見方・考え方を働かせる授業を通して～
22	〃	向陽小	複式	6	43	子ども自らが学びを創る授業づくり ～複式授業を見据えた主体的な学びの充実を通して～
23	阿武町	福賀小	2	2	8	自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成 ～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～

実践記録

つながりを大切にし　未来を切り拓いていく子どもの育成

～学び合う学習集団づくりをめざして～

岩国市立河内小学校

1　はじめに

本校は、岩国市郊外の岩国西中学校区にあり、中学校１校、小学校２校でいずれの学校も小規模校である。児童生徒は幼い頃からの交流が多くあり、小規模ながら家庭的な温かい雰囲気にあふれ、明るく元気にのびのびと学校生活を送っている。保護者および地域全体で子どもの「学びと成長」を支援するために校区内の教育活動に対して協力的で学校行事等においてはPTA や地域の方々の積極的な参画支援が行われている。学校運営協議会や地域教育ネットでは子どもの健やかな成長を願う「熟議」から、「補充学習」、「読み聞かせ」「環境整備」、「学校安全ボランティア」など年間を通じて積極的な学校支援が行き届いており、学校の教育活動に対して理解があり、温かい雰囲気に溢れた地域である。

2　研究主題

（１）研究主題設定の理由

研究主題を具現化するために、学力向上において求められている「主体的・対話的で深い学び」を少人数および複式の学級の中で、「学び合う集団づくり」を中心として研究実践を進めていく。児童の「学び合う学習集団づくり」を基調として、授業において「共学びの時間の充実」を図りながら、「聞く力・話す力」の指導を充実させ、本校の課題である「学力向上」を推進していきたい。また、課題を具現化するために、育てたい力として「自他を大切にする力」と「主体的な学び」を設定した。

（２）めざす子どもの姿

【１・２年生】 ・友だちの話をしっかり聞くとともに、自分の意見を伝えることのできる児童。 ・学級、学校生活の充実や向上のため、合意形成したことを実践する児童。
【３・４年生】 ・友だちの話を共感しながら聞くとともに、理由を明確にして自分の意見を伝えることのできる児童。 ・学級、学校生活の充実や向上のため、自分の役割を自覚し合意形成したことを実践する児童。
【５・６年生】 ・友だちの話を共感しながら聞くとともに、自分の意見を分かりやすく伝え、対話できる児童。 ・学級や学校生活の充実や向上のため、役割を自覚しながら合意形成したことを他者と協力し合い実践する児童。

（３）研究仮説

【仮説１】よりよい学級・学校生活をめざし、学校生活全体の教育活動において様々なことを計画・立案・実践していく体験を重ねていくことで児童の集団の中での協働性や自己指導能力が高まり、何事にも主体的に取り組もうとする心情が育つのではないか。
【仮説２】児童が自主的によりよい学級・学校生活や人間関係を築こうとすることにより、学び合う学級・学校の雰囲気がつくられ、学ぶ意欲が高まるのではないか。
【仮説３】話合い活動で身に付けた、集団で問題を解決していく力は各教科の学習に生かされ、「共学びの時間」の充実に繋がるのではないか。

（４）仮説を具現化する研究方法および内容

① 児童の発達段階に応じた自発的活動の充実

・「河内小サミット」（話合い活動）の計画、立案、実行の仕方の指導と機会の設定。

・子どもたちが互いを認め合いながら話し合い、合意形成を図るスキルについての指導。

・教育活動全体で児童を励まし、認める教職員の言葉がけ。

② 「共学びの時間」の充実をめざした授業改善

・「聞く力」、「話す力」を育てる指導。

・授業における「めあて」と「ふりかえり」の一体化。

・複式学習におけるガイド学習の指導。

・授業評価の活用による検証改善サイクル。

・ICT 関連機器の効果的活用。

③ 家庭・地域と連携した心豊かな児童の育成

・登下校の安全ボランティア

・読書推進活動

・地域の方々を外部指導者として授業・行事等への招致。

・学校運営協議会や地域教育ネットと連携した活動

（読み聞かせ、補充学習の学習支援、ボランティア活動、しめ縄作りなどの季節行事など）

＜第１回　河内小サミット＞

3　研究の内容

（１） 研究方針

昨年度、全校体制による集団づくり活動および校内授業研究を通して、本校の集団の在り方や児童の集団の中での課題が明らかになってきた。

＜本校児童のよさ＞

・決まっていることに一生懸命に取り組む。・自分のやりたいことははっきりしており、行動的な児童が多い。お互いをよく理解しており、友だちの思いや考えを推し量ることができる。

＜本校児童の課題＞

・自分の思いや考えをわかりやすく伝えたり、相手の考えに共感して受け入れたりすることが苦手な児童が多い。・課題に対して思考を続けることが苦手。・自発的に活動を計画、実行することができにくい。・学びの意欲や向上心が低い傾向にある。

そこで、授業において「共学びの時間の充実」を図りながら、「聞く力・話す力」の指導を充実させ、本校児童の課題である「学力向上」を具現化することとした。育てたい力として「自他を大切にする力」と「主体的な学び」を設定し、すべての教育活動において「話し合い活動」を重視し、「河内小サミット（全校児童による話合い活動）」を設定した。

（２） 取組内容　～「AFPY」の教育的手法を取り入れた「ハッピースマイルタイム」～

本校児童は、自分の思いや考えを伝えたり、相手の考えに共感して受け入れたりすることが苦手な傾向にあり、少人数の学級単位では「学び合う学習集団づくり」を形成することが困難である。そこで定期的（1～2 時間／月）に「AFPY」の手法を活用した話合い活動と人間関係づくり活動を「ハッピー・スマイルタイム（児童発案）」として教育課程に仕組み取り組んでいる。本年度の研究主題に関わる育てたい力「自他を大切にする力」と「主体的な学び」を育むために３つの仮説を関連付けながら、教育活動（①人間関係作り、②話合い活動、③子どもの自発的活動）を計画・実践している。

4　具体的な取組

（１） 取組の方針

本校児童のよさを生かしながら、自主性や協調性・協働性を高めるために、児童が下記のような成功体験が得られる活動を取り入れた。

○みんなが意見を出し合うことで多様な考えが生まれ、一人では困難な課題でも、みんなで力を合わせれば達成できる。
○‘賛成’と‘共感’とは違う。意見は違っていてもお互いの意見を尊重することで、違う考えがヒントになって新しい考えが生まれたり、考えを合わせることでよりよい考えになったりすることが実感できる。

児童が安心して自分の思いを伝えることで、自己有用感や自己肯定感が高まり、授業における話合い活動が活発になる。それが学校生活に生かされ、児童の創意工夫のある自発的な活動につながることを期待している。

（２） 取組の実際

①　人間関係作り～ビーイング（Being）～の作成

「Being」とは、自分たちに必要だと思われる約束事を、活動前に確認して臨んだり、活動中にキーワードとして活用したり、活動後に自分たちの行動に照らし合わせたりできるように、書き出して、学習集団（グループ）のメンバーで常に意識をもって行動できるようにしていく方法である。（「グループの力をいかす」：ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ･ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ 著より）そこで、全校で「Being」の作成（全校・学級・教職員）に取り掛かった。

《 完成した全校 Being のお披露目会 》

５，６年生が全校ビーイングの完成を報告。３つのハートマークの中に書いてあるみんなで考えためあてを読み上げてめあての再確認をした。‘みんなでがんばっていきましょう！’と呼びかけた。

左：「一つの笑顔はみんなの笑顔みんなで楽しくおしゃべりしよう」
中：「見る・聞く・考える　みんなでなかよく話し合おう」
右：「自然に協力　助ける勇気　元気なあいさつ河内っ子」

② 「河内小サミット」・・・　「河内小をもっとよくするための　作戦①　～　作戦④」

全校で「河内小サミット」(全校話合い活動)に取り組むにあたって、「折り合いをつけて話し合い、合意形成を図ること」、「みんなで知恵を出し合って、よりよいものにすること」が大切であると考え、子どもたちに次のことを示した。

○友だちの考えのよいところを見つけるように声をかける。
○「くらべ合う」時や「まとめる」時にどうすればよいかを示す。
○「**折り合いをつける方法（合意形成)**」を示す。

そうすることで、友だちの考えのよさを見つけたり、友だちの考えを聞いて、自分の考えを変えたりすることができるようになってきた。そして、それぞれの考えのよいところをつなげて新しい考えを思いつく子どももみられるようになってきた。

《折り合いをつける方法（合意形成)》
○それぞれの意見を合わせる。
○よいところを取り入れ、新しい考えをつくる。
○順番を決めたり、時間を決めたりして全部行う。
○優先順位を決める。
○友だちの意見を聞いて、意見を変える。
○別の機会まで、とっておく。など

5　成果と課題

「AFPY」を集団づくりの起点として、全校、学級、教職員のBeing作り、みんなで話し合って決めためあてを大切にして全校や学級での様々な活動を計画し、実践し、振り返るという改善サイクルを繰り返してきた。「人間関係作りの活動」により、子どもたちの主体性や自己有用感が育ちはじめると「学習集団づくり」の土台ができあがり、「河内小サミット」を充実させ、「よりよい河内小学校」をめざしてみんなで取り組んできた。すると、学校生活全体で相手の気持ちを考えて言葉を選び、やさしい言葉かけが目立つようになってきた。そのことで、友だち同士の交流がますます深まり、日常会話においても肯定的な言葉が増えた。

話合い活動で大切にしてきたことは「みんなが納得して、話合いをすすめること」、「自分の意見を出し合い、比べ合うことで話合いをまとめていくこと」である。このことを各教科の授業（共学びの時間）においても生かし、互いの意見を出し合い、聞き合い、みんなで考えるという学習活動を進めていく力にしていきたい。この取組を深化・充実させていくためには、継続性とさらなる活動内容の工夫が必要である。

6　おわりに

集団づくりの基礎として「AFPY」の教育的手法を用いた人間関係作り、および「河内小サミット」に取り組むことで、子どもたちの人間関係が向上した。そのような中、教育活動全体で子どもたちの「学び合う学習集団づくり」が定着してきている。また、次のステップのための課題も明確になってきている。そこで、教師の側としては、児童一人ひとりの個性をとらえ、子どもたちに任せて待つ姿勢が必要である。子どもたちの「向学心」に応えつつ、「わかる喜び」「できる喜び」を感じることができるように「共学びの時間」を各教科で深化・充実させていきたい。この研究がさらに充実し「学力向上」に結び付くことを期待している。

関わり合いを通して　学ぶ楽しさを実感できる授業の創造
～子どもと創る算数科の本質に迫る学年別指導～

周防大島町立安下庄小学校

１　はじめに

本校は、周防大島の中央部南岸に位置し、大島富士と呼ばれる嵩山が学校裏にそびえ立つ豊かな自然に囲まれた、全校児童３３名、複式学級３学級、特別支援学級１学級の小規模校である。学校教育目標を「希望の朝だ　手をとって　ともに励み　成長を喜ぶ安小の子の育成」と掲げ、めざす子ども像を「よく考える子　思いやりのある子　がんばりぬく子」とし、豊かな人間形成をめざしている。「みかん作り体験」や「町の偉人宮本常一から学ぶ」等の活動を通して、コミュニティ・スクールを核としながら地域と連携した教育活動を推進することにより、子どもは健やかに成長している。

２　研究主題

現代社会は、グローバル化の進展や技術の進歩の加速によって、社会、経済、環境など様々な分野において前例のない変化に直面している。未来は不確実であり、予測することが困難である。

このような時代だからこそ、子どもには、個人や社会のウェルビーイングの実現をめざし、未来に向けて、複雑で不確かな世界を確実に歩んでいける力を育みたい。子ども自身が生きる未来を思い浮かべながら、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、責任をもって進むべき方向を自分で見出す力を獲得できるようにしていくことが我々の重要な責務であると考える。

未知なるものを探求し､少しずつ発見していくプロセスに挑むことは尊いことである。未知と遭遇した当初は戸惑いや不安があるかもしれない。しかし、それを乗り越え、その本質を探求することは好奇心をくすぐられるとても楽しいことであろう。正に「学ぶ楽しさ」である。「学ぶ楽しさ」を実感した子どもは、より主体的かつ自主的に友達や課題に関わるようになり､先述した力の獲得に大きく近づくことになるであろう｡そこで、今年度は、昨年度に引き続き「関わり合いを通して　学ぶ楽しさを実感できる授業の創造」を研究主題として掲げ、研究を推進することにした。

本校では、令和３年度に初めて複式学級が設置されたことに伴い､「複式学級における授業のよさ」について研究を進めてきた。主として学年別指導で用いる手立て（リーダー学習や見通しボード等）を日頃から活用することで、児童同士の関わり合いを増やすことができた。令和４年度からは、算数科に焦点をあて、より具体的な研究を進めてきている。そして、完全複式となった今年度は、これまでの経緯を踏まえ、算数科の本質に迫る学年別指導を子どもと創りあげることで主題の解明に迫りたい。

【研究仮説】
学年別指導において､関わり合いを軸とした算数科の本質に迫る授業を､子どもとともに創造できれば、子どもは「学ぶ楽しさ」を実感することができる。

３　研究の内容

⑴　安小学びの５か条を、全校体制で取り組む。

⑵　研究仮説を基に、算数科の本質に迫るために、次の二つの研究の視点を設定し、算

数科における授業研究や教育活動全体を通して検証する。

Ⅰ　子どもの「解決したい」を引き出すための教師の活動・言葉がけ

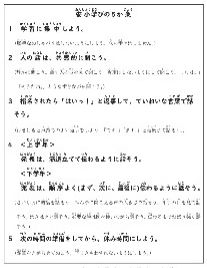
Ⅱ　図や数、式を用いて伝え合う力を高めるための教師の活動・言葉がけ

⑶　より分かりやすい授業にするために、振り返りを充実させ、子どもの学びを把握する。

4　具体的な取組

⑴　安小学びの５か条について

本校では安小学びの 10 か条が十年以上受け継がれてきていた。しかし、形骸化しており、子どもは 10 か条があることを知っていても、内容までは覚えていない状況であった。我々は、子どもが自ら進んで「学びの約束を守りたい。」という気持ちをもつことが重要だと考えた。そこで、子どもの手で安小学びの 10 か条の見直しをさせることにした。その際、学校運営協議会の議題にしたことにより、子どもは地域の人と話し合いながらこれまでの約束の見直しを行うことができた。そうして完成したのが安小学びの５か条(写真１)である。


安小学びの５か条

1　教室に集中しよう。

2　人の話は、相手の目を見よう。

3　相談されたら「はいっ！」と返事して、ていねいな言葉で話そう。

4　<学習前>
教室は、授業前までに整わせるように努める。
<学習中>
教室は、解答よくはず、丁寧に、最後まで聞けるように整えよう。

5　本の時間の前までに、読み終わにしよう。

（　）年（　）組（　）番
名前（　　）

写真１

⑵　算数科の授業研究における取組

Ⅰ　子どもの「解決したい」を引き出すための教師の活動・言葉がけについて

第１学年「かたちあそび」

この単元では、身の回りにある立体について、自立的、協働的に試行錯誤しながら、ものの形の特徴を捉えさせたい。しかし、本児には、同学年の子どもがいないため、多様な考えに触れる機会が少ない。そこで、間接指導時に、学習課題を２年生からの手紙として届けさせた。子どもは「２年生は、どうしてこの仲間に分けたんだろう。」と問いをつかみ、その理由を主体的に考えることができた。

第２学年「はこの形」

この単元では、第４学年で学習する立方体、直方体を理解する上で、箱を構成する面の形や辺の長さに着目し、それを基に考えていく態度を養いたい。そこで、「箱の形のおみくじ」を行った。子どもは、たくさんの箱の中から好きな箱を選ぶ。その後、先生が「中吉！」「小吉！」と伝える。子どもは「同じような箱なのに、どうしてこれは中吉で、あれは小吉なんだろう。どこに違いがあるのかな。」と問いをつかむ。そして、箱の面の形や辺の長さに着目し、主体的に特徴の違いを調べることができた。

第３学年「重さ」

この単元では、およその見当を付けて適切な計器を選択して測定しようとする態度を養いたい。そこで、「見当を付けてからはかりで量ろう」を行った。子どもは「ボールペンは何グラムだろう。」「ノートは多分 100 グラムだね。」と見通しをもち、実際に計器を用いて量ることができた。しかし、子どもは消しゴムの重さ等、計器に対して感量に満たない物ばかりに興味を抱いてしまった。「誰の筆箱が一番重いかな。」や「100 グラムぴったりの物を探そう。」等、工夫して課題を提示することが必要であった。

第４学年「面積」

本時では、Ｌ字型の面積の求積を通して見出した求め方を、他の複合図形の面積の求積の際に、柔軟に選択・活用できるようにしたい。そこで、「どの求め方を使いたい？」を行った。間接指導時に子どもが自力で見出した５通りのＬ字型の面積の求め方を、

直接指導時に交流した後、教師が「凸だったら？」「凹だったら？」と問う。子どもは問いをつかみ、「それは分ける方法ですね。」「それは足し引きの術がいいですね。」と意欲的に考え、「図形に合わせて方法を選ぶことが大切だ。」とまとめることができた。

第５学年「割合」

この単元では、割合を用いた比べ方を、日常生活に生かすことができるようにしたい。そこで、「お得なパンの買い方を調べよう」を行った。子どもは問いをつかみ、自力解決タイム、相談タイムと時間をマネジメントしながら、協働的にリーダー学習を進めることができた。しかし、生活に生かすという意味では、バーゲンセール等の生活に密着した場面を導入で提示すれば、子どもはより意欲的に取り組んだと思われる。

第６学年「資料の調べ方」

この単元では、結論について批判的に捉え、妥当性について考察しようとする態度を育てたい。そこで、授業の後半に、教師が「騙されない見方でグラフを使って説明しよう。」と３問の○×クイズを提示した。子どもは「２問目は違うよ。だって、…だから。」と問いをつかんで思考することができていた。騙されないという教師の言葉がけが、データの特徴や傾向に着目したグラフの正しい読み取りにつながっていた。

なかよし第６学年「およその面積と体積を考えよう」

この単元では、身の回りの具体的な形を多様な図形の見方を働かせて、概形として捉える力を高めたい。そこで、「どんな形に見えるかクイズ」を行った。教師が池やホットケーキのイラストを提示すると、子どもは「平行四辺形！」「円！」と答え、「だいたいの形として捉えるのだな。」と見通しをもつことができた。しかし、本時の課題となる琵琶湖を提示したとき、三角形や台形とは捉えることができなかった。もう少し子どもの思考に寄り添いながら、教材を提示していくことが大切だった。

Ⅱ　図や数、式を用いて伝え合う力を高めるための教師の活動・言葉がけについて

第１学年「かたちあそび」

授業の終末に２年生からのアドバイスをもらう場面を仕組むことで、子どもが自分の思いを発言したり、人の話をじっくり聞いたりする活動を保障することができた。また、たくさんの実物を用意することで、操作を通して捉えさせることができていた。

第２学年「はこの形」

教師の「自分達で解決してごらん。」と言う言葉がけ以来、子どもは円形(写真２)に机を並べ、課題を何とか解決しようと話合いを進めるようになった。本時においては、子どもが立体を平面で見ることは難しかったため、タイミングを捉えた支援が必要であった。

写真２

第３学年「重さ」

子どもは、計器に対して感量に満たない軽い物ばかりを量り、目盛りを正確に読み取ることができていなかった。ねらいとは別の方向に学びが進んでいる際には、軌道修正をかけるための教師の出場（タイミングを捉えた直接指導）が必要であった。

第４学年「面積」

集団解決の場面ではリーダー学習の活用により、子どもが主体的に学びを進めることができた。しかし、板書が乱雑になり、終末で見直すことが難しくなった。そのため、求積方法について統合的・発展的な考察を促すことに支障をきたしてしまった。

第５学年「割合」

子どもが説明しながら式を書くため聞き手も分かりやすい。本時では、値引き表にすることで比較しやすかったが、問題解決にはつながっていない。既習の数直線図を活用させれば、基準量に着目する子どもの姿を見ることができたであろう。

第６学年「資料の調べ方」

子どもだけで、言葉をつなぎ、意見をつないでいく場面が幾つも見られた。間接指導時の子どもの対話の流れを教師が板書で確認できるように、発言のキーワードや要点を子ども自身に黒板に書かせる方法を試してみたい。

なかよし第６学年「およその面積と体積を考えよう」

絵や図を見ただけで概形を捉えることは、子どもにとって難しかった。ワークシートを渡し、実際に子ども自身の手で、おおよその図形をかかせることが必要だった。手立てとして、作業的な活動をあらかじめ準備しておく必要があった。

⑶　振り返りについて

子どもの学びを把握するために、毎時間、振り返りを書かせることができた。複式のよさを生かし、他学年に本時の学びを報告する場面を設けていた学級もある。その効果については、来年度以降検証していきたい。

５　成果と課題

⑴　成果

・　事前に教師の出場（直接指導）を計画しておくことで、子どもに的確に問いをつかませたり、問い返し（根拠を問う、共通点・相違点を問う、一般性を問う、発展性を問う）で揺さぶったりして、子どもに深く思考させることができるようになってきた。
・　どの学年においても、見通しボードを用いることで、自力解決、相談と時間をマネジメントしながら、リーダー学習を進めることができるようになってきた。
・　教師が授業前に、子どもの思考の流れを想定して構造的な板書を準備し、それを用いて穴埋め形式で進めていく授業方法は、子どもに安心感を与えることが分かった。
・　安小学びの５か条や見通しボードを、子どもに委ねれば委ねるほど、子どもの主体的かつ自主的な行動を引き出すことができた。

⑵　課題

・　リーダー学習が身に付いてきた次の段階として、子どもの発言・活動を教師が適宜価値付けるために、見守り型支援の場面を増やしたい。
・　子どもに統合的・発展的な考察を促すには、学年別指導でも板書を構造的に整理する必要がある。その際、ホワイトボードを用いて、子どもに板書を委ねたい。
・　安小学びの５か条　第２条「人の話は、共感的に聞こう。」をどの子もできるようにさせたい。その際、教師は認知的共感と情緒的共感を意識し指導していきたい。

６　おわりに

地域の協力や拡大集合学習の連携校である島中小学校、浮島小学校の支援により、実りのある研究を行うことができた。本年度はフラダンス共同プロジェクトによる周防大島高等学校との小高連携もスタートさせることができた。今後も、地域・学校同士の関わり合いを大切にし、学ぶ楽しさを実感できる授業を子どもとともに創造していきたい。

主体的対話的で深い学びを成立させる授業の展開
～小規模校における自律的な学習展開をめざして～

周南市立八代小学校

１　はじめに

本校は、周南市の東部に位置し、ナベヅルの渡来地として特別天然記念物に指定されている八代にある。「ふるさと『八代』に誇りをもち、豊かな心と知恵でたくましく生き抜く『やしろっ子』の育成」を学校目標に掲げ、全校児童１３名が、豊かな自然の中で学んでいる。また、中学校区７校による「熊毛学園」地域協育ネットにおいて、めざす子どもの姿を「出会い　つながりを大切にする子」「学びを楽しむ子」「みんなのよさを見つける子」「自分の体を大切にする子」と定め、その具現化に向けて学校・家庭・地域の絆を深め、協働した教育活動の充実を図り、子どもたちの学びを支えている。

２　研究主題

本校は、平成 30 年度から、自分の思いや考えを表現できる児童の育成に取り組んでおり、授業を貫く主発問の設定、学習の流れのパターン化、ヒントカードの活用、学びの過程を価値付ける評価等、小規模校における主体的・対話的で深い学びを成立させるための手立てを講じてきた。児童は、自分の思いや考えを全校朝会や集会、行事など、様々な場面で表現することに慣れてきている。

一方で、学力定着状況確認問題において県平均に届かない児童もおり、一人ひとりの課題を明確にして取り組む個別学習の改善、表現力の向上や確かな学力の定着に向けた一層の授業改善等が必要である。また、複式学級２、児童数２名の単式学級１、特別支援学級１という学級編成であるため、複式指導における効果的な間接指導の工夫、少人数での学び合いの在り方についても、研修を深めていくことが必要である。

そこで今年度は、研究主題・副主題を「主体的・対話的で深い学びを成立させる授業の展開～小規模校おける自律的な学習展開をめざして～」と設定した。

研究の視点は以下の通りである。

【研究の視点】
- ○　**自律的な学習展開を実現するための手立て**
- ○　**主体的・対話的で深い学びを実現するための手立て**
- ○　**よりよい表現の仕方を学ぶ～ＩＣＴを活用した学習交流の場を通して**

３　研究の内容

３つの研究の視点と、それぞれの具体的な手立てを以下のように設定し、授業研究をとおしてそれぞれの有効性を検証していった。

○　自律的な学習展開を実現するための手立て
- ・　学習の流れをパターン化し、学習活動が停滞しないようにする。
- ・　他教科、活動との関連を意識した単元計画で、学習の目的や見通しをもたせる。

○　主体的・対話的で深い学びを実現するための手立て

【主体的な学び】

・　身近な題材を取り上げることで、興味・関心を高める。

【対話的な学び】

・　児童の実態に合った個に応じたヒントを必要に応じて提示する。

・　児童のつまずきに対応したり多様な考え方を生み出したりと、話合い活動で活用できるようにする。

・　単元計画の中で、学習内容や個別の課題に応じて、効果的な場面を選んでＩＣＴを活用していく。

・　個に応じた適切な支援を充実させ、児童の興味・関心を高めるとともに、考えを発表・共有して自分の考えを広げ、深めていく。

【深い学び】

・　一人学びの後の学び合いの場で、互いの学び方の良さや課題に気付けるよう、自分の考えを表現したり共有したりする活動を仕組む。

・　振り返りの時間を確保して発表し、互いの学び方の良さや課題を共有する。

○　よりよい表現の仕方を学ぶ～ＩＣＴを活用した学習交流の場を通して

・　学期に１回程度、他校とのＩＣＴを活用した交流の場を仕組むことで、多様な考え方やよりよい表現の仕方に気付けるようにする。

４　具体的な取組

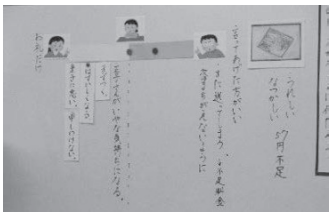
（１）授業研究　1・2年　算数科　1年「おおきさくらべ（1）」　2年「たし算とひき算のひっ算（2）」

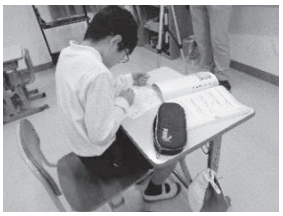
１年生児童２名のうち１名は、自力で考えたり友達に伝えたりしながら考えを深めていくことが難しい。もう１名は、理解力が高く、リーダーとして学習を進めることができるが、自分の考えを無理強いして友達の意欲を損なわせてしまい、間接指導を中断せざるをえないこともある。本単元では、「やってみたい」という思いや「なぜだろう」という意欲を高めるために、「やしろフェスティバル(学習発表会)で食べる豚汁の量を比べる」という生活経験の場を設定し、実物を使って比べる活動を取り入れた。その結果、児童は学習内容に興味をもち、最後まで意欲的に取り組むことができた。また、学習のねらいに沿ったヒントカードを活用することで、「かさのくらべ方」を押し付けることなく友達に伝えたり、友達の意見を取り入れたりしながら自分の考えを深める姿が見られた。

２年生児童２名は、どの単元でも話し合いながら意欲的に課題に取り組む姿が見られる。一方で、個別学習になると、集中できずに他学年の様子が気になるなど、課題が進まなくなることもある。あえて一人学びの時間を減らして話し合いながら課題に取り組む時間を増やすことで、学習への集中が高まるのではないか、また、繰り下がりの仕方の説明をボードに書き残させておくことで、自分たちの考えをより具体的に担任に伝えることができるのではないかと考えた。しかし、「いつもの進め方通りにしないといけない」という思いから話し合いが進まなかったり、具体物が無かったため問題場面をイメージして考

えることが難しかったりした。結果、学習を途中で終わることになったが、後日、具体物を用意し、それを使って話し合いを進めるよう設定したところ、友達と関わり合いながら、「繰り下がりが２桁におよぶ筆算の計算の仕方」を分かりやすくまとめることができた。

（２）授業研究　４年　道徳科　「友達への注意」【友情、信頼】（教材名：大きな絵はがき）

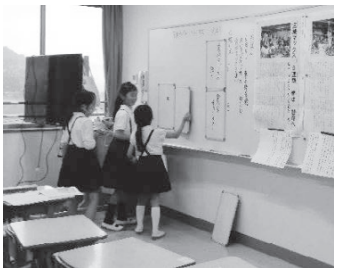




導入では、「友達とはどういうものか」今の児童の価値観を出させることで、道徳的価値について関心をもたせることができた。展開では、ワークシートに自分の考えを記入する前に「心のメーター」を使うことで、児童の考えがどこにあるのかを視覚的に捉えられるようにした。そうすることで、学習が進むにつれ、児童自身が自分の考えが変容していく様子も見取ることができた。また、本学級児童は２名と少人数なので、「多面的・多角的に考えを深める」ために、他校児童の意見を紹介し、自分の考えと比較することで、考えを深めさせることができた。主人公と同じ立場で手紙を書く活動では、相手のことを思う大切さとその難しさを実感させることもできた。展開全体を通して、教師側から理由を尋ねたり問い返したりすることで、考えを振り返らせ、深めさせるよう意識して授業を行ったが、「対話的な学び」にするためには、「教師対児童」だけでなく「児童対児童」の活動の場を仕組む必要があった。終末においては、道徳的価値について考えさせ、児童の変容を見ることができたが、児童自身の生活との結びつきが弱かった。児童の生活とどうつなげていくかも今後の課題である。

（３）授業研究　５・６年　国語　５年「新聞を読み比べよう」　６年「インターネットの投稿を読み比べよう」

５年生は「新聞の見出しを考えること」、６年生は「議論に参加して自分の意見を投稿すること」を、それぞれ単元のゴールに設定して学習を進めた。そうすることで、身に付けなければいけない力を児童自身が考え、毎時間の学習に必要感をもって臨むことができていた。見通しをもって活動することが、自律的な学習にもつながったと考える。



５年生児童は、話し合いやグループ活動には意欲的に取り組み、助け合いながら学習を進めることができるが、個人では、読み取りや考えを表現することに苦手意識をもっており、一人で活動を進められないことも多い。グループ活動を多く取り入れ、みんなで課題を解決していくようにすることで、意欲的に活動に臨み、関わり合いながら学習することができた。また、児童が困ったときのために、穴埋めのヒントカードを用意しておくことで、自分の考えをもって表現することができた。

６年生児童は、どの学習でも自分の意見をもとうと意識し、互いに協力して学習を進めることができる。一方で、話し合いでは、伝え合いで終わってしまうことも多く、

考えを広げたり深めたりすることに課題があった。手立てとして、教材文にある投稿の立場を読み取る際に、タブレットの Jamboard を使い、立場で色分けをしたり、根拠となる文章に線を引いたりすることを取り入れることで、互いの考えの根拠に注目して聞き、相手の意見にも納得したり話し合いを深めたりすることにつながった。

（４）はばたき教室　自立活動　５年　「集中力アップ大作戦」

主体的・対話的で深い学びを成立させるためには、相手の言葉を聞き取り、記憶する必要がある。本時では、この機能を高めるために聴覚ワーキングメモリのトレーニングを行った。活動の内容は、教師が２つまたは３つの文章を読み、児童はそれを聞きながら、各文章の最初の単語を覚え、さらに動物の名前が出てきたら手をたたくというものである。児童は動物が好きということもあって、最初の単語を覚えたり、動物の名前に合わせて手をたたいたりするという活動に興味をもって集中して取り組むことができた。このような活動に定期的に継続して取り組むことで、聴覚ワーキングメモリを増やし、話を集中して聞いたり内容を聞き取ったりする力を育てていきたい。

５　成果と課題

（成果）

・　単元のゴールを設定し、必要感や見通しをもって活動に取り組めるようにすることで、身に付けたい力を児童自身が考え、自律的な学習展開を促すことにつながった。
・　自分たちに関わりのある行事や活動と関連付けたり、生活に結びつけて導入を行ったりすることで、学習内容を自分事として捉え、主体的に取り組むことにつながった。
・　学級の児童の反応やつまずきを予想するなど、児童の姿を中心に授業計画を立てたり、ヒントカード等、支援の手立てを考えたりすることで、児童一人ひとりが意見をもち、主体的・対話的に学習に取り組むことができた。
・　他校児童の意見を提示することで、多様な意見に触れ、考えを広げることができた。

（課題）

・　複式学級において、自律的な学習にしていくためには、リーダーの育成が必要である。児童には授業の流れのガイドを示しているが、実際に進めるのは教師になることも多い。ただ司会をするだけでなく、みんなの意見を引き出しまとめることができるようにしていくとともに、共感者となるフォロワーの育成も必要である。
・　少人数学習における効果的なＩＣＴ活用を考え、積極的に取り入れていきたい。

６　おわりに

本校では、八代の自然豊かな環境や地域行事などと関わり合いながら学習を進めている。また、研究授業の際には、地域の方にも常に声をかけ、授業参観や協議に参加していただいている。今後も、こうした八代のよさや強みを全教職員が大切にし、学校、家庭、地域が思いを共有し、連携、協働して教育活動を進めていきたい。

主体的に学び、豊かに表現することができる児童生徒の育成
～表現力を高める活動の充実を目指して～

防府市立野島小・中学校

1　はじめに

本校が建つ野島は、防府市三田尻港から東南へ約 15 キロメートルの瀬戸内海上に位置し、島のほぼ全域が瀬戸内海国立公園の区域に指定されている。全校児童１名（６年生)、全校生徒６名（１年生２名、２年生１名、３年生３名）が在籍し、「子どもたちの将来の自立をめざす～賢く、優しく、そして強い子どもを育てる～」を学校教育目標に掲げ、「茜島シーサイドスクール事業」を通して海に囲まれた豊かな自然の中で特色ある体験活動が行われている。このような環境下でさらに少人数での教育活動を行うことができるため、落ち着いた雰囲気の中で子どもたちの育成に努めている。

2　研究主題

４・５月には、多くの異動があったこともあり、改めて野島小・中学校の現状や課題を教職員間で挙げ、今年度の研修主題について検討した。本校は少人数であることから「生徒間の関わりが少ない」ことや「多くの学習活動において子どもが受動的になっている」ことが課題として大きく挙げられた。昨年度から児童生徒数がおよそ半減したこともあり、協働の場面が少なく自ら学び発信していく時間が少ないことがより明らかとなった。それらを踏まえて、本年度の研修主題を「主体的に学び、豊かに表現することができる児童生徒の育成～表現力を高める活動の充実を目指して～」と設定した。その中でも「主体的」また「表現する」に力を入れ、さまざまな個性のある子どもの主体性や表現力を伸ばすために、どのようなことができるか、研修を通して考えていった。

3　研究の内容

本校では、研修主題に沿って「主体的に学び、豊かに表現することができる」児童生徒の姿の実現に向けて、教科指導、特別活動などで育む資質能力が一体的、相互補完的に高まるために、以下のことを意識した教育活動を行った。

（１）「表現する力」を育む教育活動の充実
- 「表現する力」の明確化
- 「表現する力」を伸ばす場を設定した授業づくり

（２）「主体性」を伸ばす教育活動の充実（学びに向かう姿勢を育む）
- 特別活動における児童生徒主体の場面設定

（３）臨床心理学を視点とした助言による指導・支援の質の向上
- 山口大学教授によるアンケートや各種データ（学力・体力・出席状況等)、児童生徒の様子からの見取りを参考にした指導・支援の工夫

（４）支持的な風土づくりを目指した特別活動や体験活動の充実
- フリートークや全校読書、スクールカウンセラーとのグループワークなどを通した相互の表現を受け止め、共感したり、補いあったりする関係性づくり

（５）「協働的な学び」を実現するためのカリキュラムの見直し
- 年間の学校地域連携カリキュラムの見直し

４　具体的な取組

（１）「表現する力」を育む教育活動の充実

・「表現する力」の明確化

「表現する」に関しては、６・７月には、決定した研究主題のもと、教職員間で各活動・各教科の中で「児童生徒が豊かに表現する力」を具体的に挙げ、目指す姿をさらに明確にした上で、各活動に取り組んだ。

ICT 機器を用いた授業の様子

・「表現する力」を伸ばす場を設定した授業づくり

普段の授業の中でも、既習事項を用いて文章にまとめたり発表をしたりするなど、意識して考えを表現、アウトプットする時間を設けた。これらの活動では、ＩＣＴ機器（ロイロノート）を用いて、より子どもが「主体的」に活動したり豊かに「表現」したりできるように工夫した。

○授業研究　理科６年　「月の形と太陽」

月の形が日によって変わって見える理由を説明する活動を取り入れた授業を行った。理由を考える際の手立てとして、日々観察した月の形とモデル実験の結果を関連付けて考えるよう促すことで、より確かな答えを導く手助けとなった。実際に自分が見たことを教科書に載っている実験結果に結びつけることで、体験を論理的に言語化することができた。

○授業研究　理科２年　「動物の体のつくりとはたらき（呼吸）」

体のつくりについての単元で、生きているヒトが温かい理由を説明する活動を取り入れた授業を行った。身近な現象から見つかる疑問（課題）を発問として設定しているため、生徒が疑問（課題）に対して意欲的に、また主体的に学習に向かうことができた。ロイロノートの共有ノートを活用し、生徒が見ているワークシートに教員が遠隔で書き込んだり、生徒が思考しながら文章にまとめる様子を教員が見取ったりすることができた。生徒がどこでつまずいているのか、どこまで思考が進んでいるのか読み取ることができるため、個別最適な学びにＩＣＴ機器を活用する効果を実感できた。

○授業研究　数学３年　「二次方程式の利用」

文字を使った面積の表し方についての文を読み、一文一文の文の表している意味を読み解く活動を取り入れた授業を行った。数学において、式を知識として覚えるだけでなく、どうしてその文がいるのか意義を考えることで、論理的思考を育む時間となった。既習事項を用いる場面では、つまずいている生徒に対して適切にヒントを与え、ねらいに到達することができた。

○授業研究　社会科１年　「地理的分野　世界の諸地域　アジア州」

新しい自動車工場の建設地を提案する中で、その場所を選んだ理由を説明する活動を取り入れた授業を行った。建設地を選ぶ際にロイロノートの座標軸ツールを用いることで、自分の考えを整理し、他者に共有しやすくなるようにした。つまずきが予想される生徒に対しては、ヒントカードを資料箱に用意し、必要に応じて利用できるようにした。

（２）「主体性」を伸ばす教育活動の充実

・特別活動における児童生徒主体の場面設定

１学期に行った宿泊学習において、計画から準備するものリストの作成、レクリエーションの企画・実施などを子どもに任せた。ロイロノートを用いて活動ごとにカードを作成し、カードを繋げたり追加したりすることで、スケジュールを確認したり準備するものをメモしたりすることに役立てた。

宿泊学習の様子

（３）臨床心理学を視点とした助言による指導・支援の質の向上

「個別最適な学び」に関して、昨年度より山口大学で臨床心理学を担当されておられる木谷教授とそのゼミの大学院生にご協力いただき、定期的に児童生徒の様子を見取っていただいている。見取ったことや各種データなどに基づいた学習や生活、健康等に関する助言をもとに、字のフォントを適切なものに変えたり、プリントやチョークの色を調整したりするなど、教材の工夫・改善につなげた。右の写真は、ある生徒の定期テストである。見え方に特性があることを把握し、用紙をざら紙に、フォントをUDに変えて対応することで、特性に対する配慮をおこなった。また、学習面だけでなく普段の子どもへの投げかけの言葉を変えるなど、さまざまな特性のある児童生徒への指導・支援の仕方も工夫している。

以前

7．　A市からB市を通ってC市まで，100ｋｍの道のりを自動車で行くのに，A市とB市の間を時速 40 ㎞，B市とC市の間を時速 30 ㎞で進むと，3 時間かかった。このことについて次の問いに答えなさい。

(1) A市とB市の間をx時間，B市からC市の間をy時間かかったとして連立方程式を立てなさい。(3 点)

現在

7．A市からB市を通ってC市まで，100kmの道のりを自動車で行くのに，A市とB市の間を時速 40 ㎞，B市とC市の間を時速 30 ㎞で進むと，3 時間かかった。このことについて次の問いに答えなさい。

(1)A市とB市の間をx時間，B市からC市の間をy時間かかったとして連立方程式を立てなさい。(3 点)

助言をいかしたフォントの工夫

（４）支持的な風土づくりを目指した特別活動や体験活動の充実

育てたい子どもの姿をはっきりとさせた上で、委員会活動やフリートーク、全校読書、スクールカウンセラーとのグループワークなど、さまざまな活動を通して、「表現する力」を育んだ。フリートークではお題に沿って子どもが意見を出し合う場面で、全校読書では本の紹介をする場面で、自分の考えを述べたり、他者の考えにふれたりすることができた。スクールカウンセラーとのグループワークでは、「他人の発言を絶対に否定しないこと」というルールのもとに、全員が一度は発言する機会を設けた。安心して発言できる支持的な風土のもと、子どもたちは、自分の思いを人に伝える経験を重ねることができた。

全校読書での本の紹介

SC とのグループワーク

地域の方とのしめ縄づくり

（５）「協働的な学び」を実現するためのカリキュラムの見直し

学級集団や学習集団において、子ども同士や子どもと教師、子どもと地域の方々など、多様な他者との関わりを通してよりよい学びを創り出す「協働的な学び」を充実させるため、以前より行っていた学校行事や特別活動、体験的な活動の見直しを始めている。年間を通して、自然活動や地域と関わる行事における各活動で、子どもたちに身につけさせたい力を考えながら既存の活動を整理する必要がある。年間の学校地域連携カリキュラムをもとに各活動で目指す子どもの姿をふまえた活動となるようにしていきたい。

５　成果と課題

（１）成果

研究内容（１）「表現する力」の育成については、文章表現だけでなくさまざまな方法を選んで表現するようにした。児童生徒は、タブレットを活用して考えたことを図にまとめるなど、伝える相手を意識した表現を行うことができた。研究内容（２）「主体性」については、普段から発言することに難しさを感じる生徒の意見も表出することができた。宿泊学習では、リーダーが他の意見をよく聞いて役割分担をしていく姿も見られ、子どもたちが自ら考え動き、そしてやり遂げる姿を見ることができた。また、研究内容（４）「支持的な風土づくり」については、各活動において全員が必ず役割を担うため、表現する側と聞く側それぞれの立場になって活動することを通して、相手に共感する態度を育むことができた。

（２）課題

子どもから７月にとったアンケートによると「表現する場が設けられている」という項目に低い結果が出た。子どもたちが「これからの社会で生きていくために求められる力」について理解・自覚できるよう、「めあて」を洗練させ、「何のために」表現することを大切にしているのか、教員が日々指導や声かけをしていくことがまだまだ必要であると感じた。従来の教育の成果を踏まえづらく、変化の予測が難しいと言われるこれからの時代の中で、学んだことをもとにさまざまな形で表現する力は、さまざまな場面で最適解を導き出すために重要な力であると言える。この認識を、教員間だけでなく子どもたちにも伝わるようにしていくことが今後の課題である。また、子どもたちに協働的な学びで得たことを実感させたり分からなかった課題を克服する過程を経験させたりし、子どもの主体的な学びに繋げるためにも、「ふりかえり」の充実が必要だと感じた。

６　おわりに

新型コロナウイルスの影響で、残念ながら地域との関わりが以前に比べて薄くなっているが、依然として自然と関わる行事は多く、シーカヤックの体験や本島の近くにある平島への探検、地域の方の協力を得た芋の栽培など、多くの自然体験ができている。そのほかにも、盆口説きやしめ縄づくりなど、地域の方と一緒に地域の伝統文化に触れる体験も行っている。これからの研修では、こういった多くの体験活動の中で目指す姿、育みたい力を明確にして教職員で共有していくことも進め、本校の強みを生かしながら子どもの成長に繋げていきたい。

かかわり合いを深め、ともに学び合う小野っ子の育成
～子どもの学びを支援する少人数指導の創造～

宇部市立小野小学校

１　はじめに

本校は宇部市の北部、宇部の水源である小野湖のほとりにある全校児童２１名、４学級の学校である。地域文化を生かした特色ある活動はお茶・梅・カヌー・和紙・竹など多岐にわたり、「地域力を生かして、自分と人を愛し､志高く挑戦し続ける小野っ子の育成」を学校目標に、少人数の特性を生かし、主体的に活動する子どもの育成を第一にして取組を進めている。

２　研究主題

児童は何事にも前向きに取り組んでおり、お互いにアドバイスをし合ったり、分からないことを教え合ったりしている。しかし、友だちの考えをもとに深めた考えを分かりやすく表現し合い課題解決に向かう子ども同士による深い学びが課題であった。

今年度から研究主題を「かかわり合いを深め、ともに学び合う小野っ子の育成～子どもの学びを支援する少人数指導の創造～」とし、ＩＣＴを効果的に活用しながら複式学級の良さを生かした「学び合い」のある授業について研究に取り組んでいる。昨年度までの成果と課題を引き継ぎ、子どもたちが主体的に学ぶための教師の役割を考え、自分たちで課題解決に向かう授業を目指して研究に取り組んできた。そのなかで学習課題と児童が出会う場を演出したり、自分一人では解決が難しい学習課題を設定したりして、学習効果が上がるような工夫を行うことが重要であり、教師がそのような働きかけを行うことで、子どもたちは自然と主体的に学び合う力や、伝え合う力がついてくると考え研究を進めた。特に、小規模校ならではのＩＣＴの活用方法を工夫し、学び合いを深めることでさらに研究を深めた。

【研究仮説】

少人数・複式授業に合ったＩＣＴの効果的な活用を研究することによって
- Ⅰ「教師の働きかけ」に新しい工夫が生まれ、児童のかかわり合いや理解を深めることができるのではないか。
- Ⅱこれまでにない話合い活動や表現活動、ふり返りができ、表現する力を高めることができるのではないか。

３　研究の内容

【Ⅰについて】

授業における教師の働きかけには様々なものがある。

①学習課題に関する働きかけ　②発問・説明・指示　③学習形態の指示
④学習活動に関する働きかけ　⑤板書　⑥ノート指導　⑦ワークシートの提示
⑧資料提示　⑨ふり返りの指示・指導　等

この中から児童の実態に合った働きかけを教師が選び実施することで、内容をより深く考えてみたくなったり、自分の中で理解して終わるのではなく誰かに説明したり、自分の考えを確かめたくなったりするのではないかと考えた。その際、友だ

ちとのかかわり合いは必要不可欠となる。このような環境を整え、働きかけることは、本研究のかかわり合いを深めることにつながると考え、研究を進めた。

【Ⅱについて】

授業の中で、みんなの前で発表することは言うまでもなくすばらしい表現方法だが、自分の思考をきちんと文字に表すことも大切な表現方法である。自分の考えを持ち、話し合う中で、友だちや教師の新しい考えや似ているけど少し違う考えを聞き、理解を深めたことこそがその授業の大切な収穫である。ノートやロイロノートを開くと、その日の授業の内容がよみがえってくるようになれば、宿題で解き方を忘れても、自主学習で復習したいときも自分で解決をすることができるようになる。また、ふり返りでただ「今日は～がわかりました。」と書くのではなく、「最初は分からなかったけど、～さんの○○で分かった。」「今日は～の学習をした。たとえば～」と具体的にふり返ることで表現力を高めることができるのではないかと考え、研究を進めた。

小規模校ならではのＩＣＴの効果的な活用方法(ロイロノート、Ｚｏｏｍ等)について研究していくことを軸に、文面とＩＣＴの良さを生かしながら目の前の子どもたちの実態に応じて表現力の幅を広げていくことができるよう力を入れてきた。

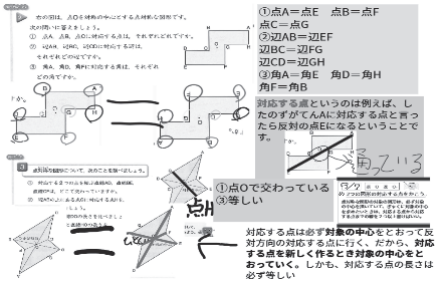
４　具体的な取組

（１）授業の主体が子どもで、教師はそれを支援する学習スタイルを『小野小スタイル』と称し、学校全体の目標として取り組んできた。学校全体で統一して取り組んできたこととしては以下の４点である。

①「聴き・伝え・深める」力を鍛えるための支援
　○友だちの考えをわかろうと「聴き」「訊く」力の育成
　○友だちに自分の考えを「伝え」「確かめる」力の育成

②「つなぐ」ための支援
　○学び合いを深めるための課題設定
　○子どもと子どもをつなぐ工夫
　○子どもと教材をつなぐ工夫

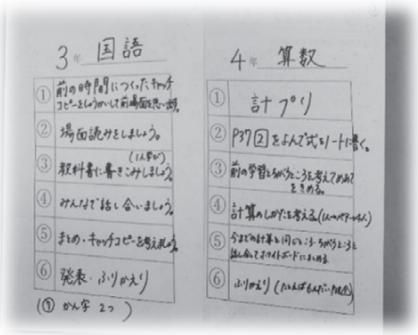
③「ケアする」ための支援
　○それぞれの課題を明確にしたふり返り課題の設定
　　「何を学んだのか。」「何がわかったか。」「どうやってわかったか。」
　○子ども一人ひとりの見取りと、一人ひとりの学びへの課題設定と支援



④「表現力」を高めるための支援
　○ふり返りの指導の充実
　○表現方法や表現機会、表現対象の工夫

（２）次に、それぞれの学年の発達段階に応じた『小野小スタイル』の確立に向けた取組についてである。

①低学年では、入学当初は教師の指示を聞きながら「複式」という学習スタイルに慣れることを目標とした。他の学年の学習の様子を見ることで学習の仕方を知り、今では教師がいなくても、少しずつ自分たちで考えを伝え合うことができるようになってきた。一人学年もあるため、子どもの意見に寄り添いながら授業の仕方を工夫している。



②中学年は、教師の出る場面を低学年より少なくし、学習の流れシートを用いて自分たちで学習を進め、課題設定と課題解決を図ることを目標とした。教師の支援が必要な場面もあるが今ではめあてやまとめも自分たちで考えることができるようになってきた。

③特別支援学級では、児童の状態や課題に寄り添いながら内容を工夫した。目的や達成感を児童自身がしっかりと感じることができるような学習内容を考え、学習したことが日常生活とつながるよう意識した。

④高学年では、学習の流れシートをなくし、本時の課題を伝えるだけで学習を自分たちで進められることを目標とした。友だちの考えに寄り添いながら内容を深め、電子黒板、ホワイトボードを自由に使い、授業を展開できる。ここには複式定番のガイドもリーダーもなく、児童みんなが目指す『小野小スタイル』の主体的な授業がある。

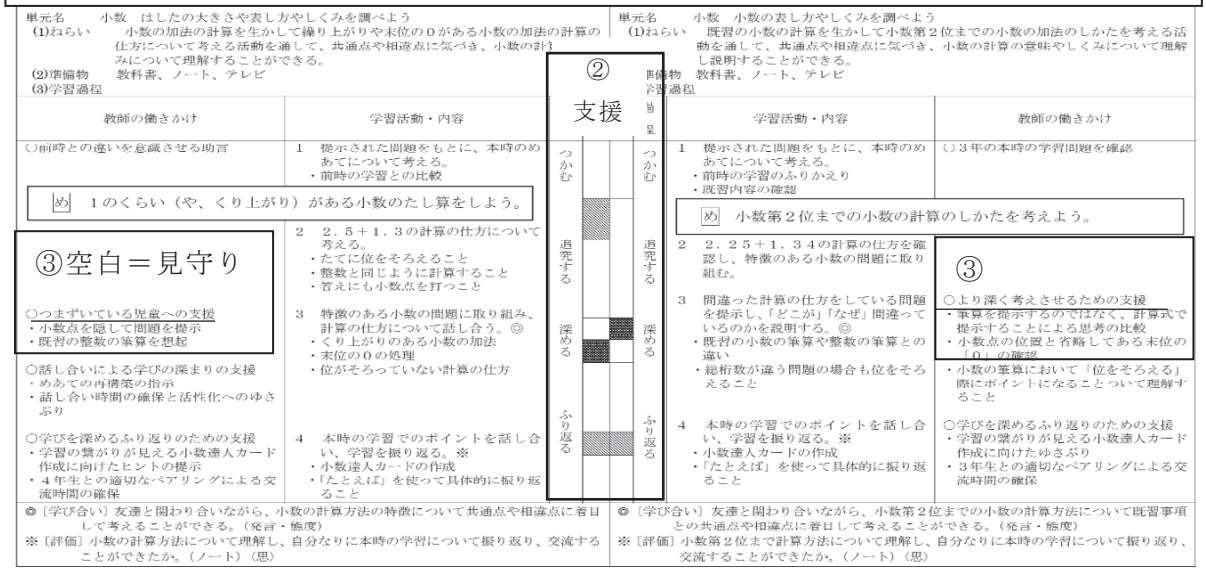
（３）最後に、指導案についてである。『小野小スタイル』をさらに明確なものにするために指導案にも子どもを主体とした授業であることを大きく３点表した。

①一つ目は宇部市の取組である「授業のスタートライン」をもとに、本時で２学年共通の子どもに付けたい力を示したことである。子どもにつけたい力を明確にすることで授業でいつどのような手だてが必要か意識することができた。

②二つ目は「わたり」という意識を「支援」に変更したことである。本当に必要な支援ができるよう学習内容を吟味し、本事案の中央部分に色の濃さで教師の支援の重要度を示した。濃い部分では揺さぶりや支援が必要な子への声かけ、薄いほどそのときの状況に合わせて支援をするかしないかを判断するようにした。

③三つ目は教師の働きかけである。子どもたちが授業の主役となるように教師は敢えて「働きかけない」という新しい支援をはっきりと示した。また、学年の実態に応じた支援もそれぞれ示し、各学年で必要な支援のポイントを変えている。

①ながれシートをもとに前時の学習と比較をしながら、めあてや問題について話し合い、一人ひとりが課題に対して責任をもって考えることができる。



単元名　小数　はしたの大きさや表し方やしくみを調べよう
(1)ねらい　小数の加法の計算を生かして繰り上がりや末位の０がある小数の加法の計算の仕方について考える活動を通して、共通点や相違点に気づき、小数の計算のしくみについて理解することができる。
(2)準備物　教科書、ノート、テレビ
(3)学習過程

教師の働きかけ	学習活動・内容	支援	
○前時との違いを意識させる助言	1　提示された問題をもとに、本時のめあてについて考える。 ・前時の学習との比較	つかむ	つかむ
め　１のくらい（や、くり上がり）がある小数のたし算をしよう。			
③空白＝見守り ○つまずいている児童への支援 ・小数点を隠して問題を提示 ・既習の整数の筆算を想起	2　２．５＋１．３の計算の仕方について考える。 ・たてに位をそろえること ・整数と同じように計算すること ・答えにも小数点を打つこと	追究する	追究する
○話し合いによる学びの深まりの支援 ・めあての再構築の指示 ・話し合い時間の確保と活性化へのゆさぶり	3　特徴のある小数の問題に取り組み、計算の仕方について話し合う。◎ ・くり上がりのある小数の加法 ・末位の０の処理 ・位がそろっていない計算の仕方	深める	深める
○学びを深めるふり返りのための支援 ・学習の繋がりが見える小数達人カード作成に向けたヒントの提示 ・４年生との適切なペアリングによる交流時間の確保	4　本時の学習でのポイントを話し合い、学習を振り返る。※ ・小数達人カードの作成 ・「たとえば」を使って具体的に振り返ること	ふり返る	ふり返る
◎〔学び合い〕友達と関わり合いながら、小数の計算方法の特徴について共通点や相違点に着目して考えることができる。（発言・態度） ※〔評価〕小数の計算方法について理解し、自分なりに本時の学習について振り返り、交流することができたか。（ノート）〔思〕			

②

単元名　小数　小数の表し方やしくみを調べよう
(1)ねらい　既習の小数の計算を生かして小数第２位までの小数の加法のしかたを考える活動を通して、共通点や相違点に気づき、小数の計算の意味やしくみについて理解し説明することができる。
(2)準備物　教科書、ノート、テレビ
(3)学習過程

学習活動・内容	教師の働きかけ
1　提示された問題をもとに、本時のめあてについて考える。 ・前時の学習のふりかえり ・既習内容の確認	○３年の本時の学習問題を確認
め　小数第２位までの小数の計算のしかたを考えよう。	
2　２．２５＋１．３４の計算の仕方を確認し、特徴のある小数の問題に取り組む。 3　間違った計算の仕方をしている問題を提示し、「どこが」「なぜ」間違っているのかを説明する。◎ ・既習の小数の筆算や整数の筆算との違い ・総桁数が違う問題の場合も位をそろえること	③ ○より深く考えさせるための支援 ・筆算を提示するのではなく、計算式で提示することによる思考の比較 ・小数点の位置と省略してある末位の「０」の確認 ・小数の筆算において「位をそろえる」際にポイントになることついて理解すること
4　本時の学習でのポイントを話し合い、学習を振り返る。※ ・小数達人カードの作成 ・「たとえば」を使って具体的に振り返ること	○学びを深めるふり返りのための支援 ・学習の繋がりが見える小数達人カード作成に向けたゆさぶり ・３年生との適切なペアリングによる交流時間の確保
◎〔学び合い〕友達と関わり合いながら、小数第２位までの小数の計算方法について既習事項との共通点や相違点に着目して考えることができる。（発言・態度） ※〔評価〕小数第２位まで計算方法について理解し、自分なりに本時の学習について振り返り、交流することができたか。（ノート）〔思〕	

5　成果と課題

［成果］

・目指す『小野小スタイル』を明確にし、学校全体で一貫性のある指導を続けることで、教師の指示を待たずに子どもたちが主体的に学ぶようになったこと
・子どもの発達段階に応じて段階的な教師の働きかけや支援を行うことで、子どもたち自身に無理のない学び方が定着したこと
・ＩＣＴの様々な活用を通して、ＩＣＴを使った方が良い場面と使わない方が良い場面を把握することができるようになったこと（少人数学級でのＩＣＴの有効的な活用法が児童と教師共に身に付き、間接指導の時間が増えた）
・学習面だけでなく、生活面においても自分たちで主体的に行動する上学年の姿を間近で見ることで、子どもたち自身が自分の成長に見通しをもつことができたこと

［課題］

・指示を出すタイミングを見極めること（どこまで見守り、いつ揺さぶるかなど）
・複式学級の良さを生かした「個別最適化」の具体的な取組を明確にすること
・担任が変わっても、学習スタイルを継続することができ、子どもたち自身が学び方を伝えていくことができるようになること（『小野小スタイル』の継続）
・日頃から互見授業時間を確保し、こまめに情報を共有すること
・次年度を意識した隣学年のペアリングを工夫すること

6　おわりに

今年度、研究を重ねる中で、実践しながらもぼんやりとしていた『小野小スタイル』の授業の在り方を整理することができた。少人数だからこそ、また複式だからこそ「ＩＣＴの効果的な活用」「児童の主体性を生かす支援」「表現力の向上に向けた多様な手段」に気づくことができ、授業づくりのおもしろさを感じる機会となった。その機会をくださった関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、継続したものとなるよう努めたい。

確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成
～自力解決に向けた学習の進め方について～

下関市立吉母小学校

１　はじめに

本校は本州最西端の地にある学校で、北側は日本海の吉母海岸、南側は田畑や山が広がる自然豊かな学校である。本年度は１年生１名、２年生２名、３年生１名、４年生１名、６年生３名の計８名でスタートした。しかし、１０月に１家庭３名が転出し、１年生１名、２年生１名、３年生１名、６年生２名で１・２年のみ複式の３学級となった。１～３年生は全て１人学年となっている。

２　研究主題

今年度の研究主題は「確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成」で、副主題は「自力解決に向けた学習の進め方について」である。この研究主題に取り組んで４年目を迎える。副主題については、研修の成果と課題から考察し、毎年少しずつ変えてきた。これまでの研修の経緯について説明する。

１年目は「個に応じた複式学習の取組を通して」の副主題で研修を進めた。学校全体の複式学習の授業力向上、複式学習での学力向上に向けて講師を招き、特に算数科の授業づくりの研修を行った。また、学校全体で学力向上を図るため、全校朝学・ノート展・吉見中学校区での「学びのやくそく」の共通理解を行い、学習環境全体の整備に取り組んだ。その成果として、朝学を全校で行うことにより学習習慣・方法の確立ができた。また、その結果、基礎基本の底上げにつながった。ノートづくりの共通理解を行うことで、児童も考えながらノートを書き、教師も今までよりも構造的な板書を心がけるようになった。さらに、複式学習の基礎を各教員が学ぶことで授業改善にもつながった。課題としては「吉母」としての授業スタイルの構築までは至らなかった点、児童が課題に対して途中で諦めてしまう姿が見られた点が挙げられる。

２年目は、この成果と課題を踏まえ、「複式学習の取組を通して自力で課題解決する力を育てる」の副主題で研修に取り組んだ。「主発問を中心とした問題解決能力を育てる授業づくり」「児童が自力で解決する場面の設定と効果の検証」を研修の柱にし、授業改善に取り組んだ。成果として、リーダーを中心として話し合いを行ったり、練習問題に取り組んだりする複式の授業スタイルが、上学年の児童や教師に浸透してきた。また、主発問に焦点化した授業づくりにより授業のねらいが明確になり、めあてと振り返りのつながりを教師と児童が意識するなど授業改善につながった。その結果、自力で解決しようとする姿が以前より多く見られるようになった。しかし、多方面から理解を深めることには課題が残った。

３年目は、２年目と同じ「主発問を中心とした問題解決能力を育てる授業づくり」に加え、設問に対し「多方面から理解を深める力の育成」を研修の柱にして研修を行った。研修を進める中で「めあてと振り返りを意識した授業づくり」「その時間の課題をどうすれば解決できるか考える“見通し”の時間を設ける」ことで自力解決につながったという成果が挙げられた。しかし、一人学年では「多方面」から理解を深めることに限界を感じた。一人学年における複式指導・教師の支援をどう行っていくかは今後も課題が残る。

４年目となる今年度は、研修の柱を「振り返りを意識しためあての工夫」「見通しをもって自力で課題解決するための力の育成」として研修を進めてきた。今年度の内容や取組については次項３・４で示す。

３　研究の内容

（１）振り返りを意識しためあての工夫

①基礎的事項の学習をもとに、めあてを通した学びの深まりと振り返りの蓄積

②校内授業研究の実施

③複式学習における実践

④校内ノート展の実施（課題解決する力を育てる授業ノート作りに向けて）

（２）見通しをもって自力で課題解決するための力の育成

①朝学及び自学の充実（基礎基本の徹底）

②見通しのもたせ方と一人学びにおける授業の工夫

③複式学習の在り方についての実践

４　具体的な取組

（１）各学年の取組

①振り返りを意識しためあての工夫

低学年

・本時で学習する内容を考え、関連しためあてを一緒に導き出す。
　※１年生は担任が提示する。

・振り返りがめあての答えになるように毎時間の授業を仕組む。

中学年

・その時間に学習する教科書全体を確認し、児童がめあてを考える。

・必要に応じて支援を行い、振り返りが意識できるようなめあてにする。

高学年

・児童がめあてを考え、振り返りの時に「めあて」自体も振り返るようにする。

・めあてと振り返りが意識できるように教師が支援し声掛けを行う。

・めあてを意識した振り返りを取り上げて称賛することで、よりよい振り返りとはどのようなものか意識させる。

②見通しをもって自力で課題解決するための力の育成

低学年

・教科書を見て、学習の全体像を意識させる。

・課題に取り組む前に、どうやったら解けるか、解けそうかを一緒に考え、方法を板書する。「見通し」の時間の確保（２年生）

・学習のルールにのっとって活動を進める。（１年生）

　ア　間接指導中は教師に話しかけず、説明の仕方を考えたり、見直したりする。

　イ　時間が余ったときには、タブレットやドリル等で練習問題に取り組む。

中学年

・教科書全体を見て学習の全体像を把握する。

・自力で解決するために具体物・半具体物での操作活動を取り入れる。

・絵や図で表すことでイメージ化させ、自力解決につなげる。

高学年

・児童がめあてを考えることで学習の全体像が見えるようにする。

・読解力を養うために週に３回「天声こども語」を要約する活動を行う。

（２）学校全体での取組

①全校朝学

ねらい

・基礎基本の定着　　・全教員による児童の状況把握、支援

・学習の習慣化　　・上学年の取り組む姿を手本にする。

内容

月・金曜日：計算学習（ドリル・プリントで計算練習）

火　曜　日：漢字練習（漢字スキルで練習、確認テスト）

※ドリームルームに全校児童が集まって行う。

地域のボランティアの方が火・金に来校され、○付けや児童支援を行っている。

（木曜日は読み聞かせ　後述）

②全校ノート展

ねらい

・ノートづくりの共通理解を図る。

・上学年を手本にするとともに
　下学年の頑張りも認める。

内容

・月に１度を目安に実施。

・全校（教職員も含む）でノートを見合い、
　付箋に気付きを記入する。

③読書活動

ねらい

・読書習慣の定着

・読解力の育成(語彙を増やすことも)

内容

・毎週木曜日の朝学時間に、近くの吉見地区の方が
　ボランティアで読み聞かせをしてくださっている。

・毎週火曜日の中休み時間を学校図書の貸出時間にしている。

・隔週水曜日、近くの公民館に来る移動図書館「ブックル」を利用。

④お礼や感想を述べる場の設定

ねらい

・多くの人の前で発表することに慣れる。

・自分の思いを言葉で表現する力の育成。

・地域の方との交流。

内容

・大きな行事の時だけでなく、日頃の活動の場や読み聞かせ・交通教室・緑化活動等の後、参加・協力してくださった方に、児童全員がお礼や感想をその場で考えて伝えている。

５　成果と課題

（１）成果

・高学年では、複式学習を生かした児童主体の学習スタイルが定着しつつある。振り返りを意識してめあてを考えることができ、めあてというゴールに向かって学習を進めていくので理解も深まっている。

・今年度から始めた「天声こども語」の要約を継続して行うことにより、初見の文章を読み取る力が付き、要約にかかる時間もかなり短くなってきた。また、文章の前後関係から知らない言葉の意味を推察することもできるようになった。

・児童一人ひとりが自分に合った自力解決の仕方を見つけつつある。問題の内容による違いはあるが、絵や図で表したり操作活動をしたりしながら自分の力で取り組む姿が多く見られるようになってきた。

・極小規模校のため全校で活動することが多く、上学年がよい手本となって下級生を育てている。お礼や感想を述べるときは、「今日は〇〇してくださってありがとうございました。わたしは、・・・」と、決まった型を使いながら、その日の学びや体験から感じたことを入れて発表している。１年生でも最初の１文は進んで言えるようになるので、発表する機会が多くある極小規模校のよさだといえる。

（２）課題

・一人学年が多く真面目に課題に取り組んではいるが、他者と比較ができないため自分の考えや結果に満足してしまう傾向がある。教師が同学年児童の考え方の例を示しても、目の前に児童がいないのであまり関心を示さない。いかに向上心を高めていくかさらに考えなければならない。また、教師がいくつか視点を示しても一人で考えるのには限界がある。一人でも学びを広げていくにはどのように支援していくかもさらに考えていかなければならない。

・研修の柱として「振り返りを意識しためあての工夫」を挙げているが、「振り返り」と「まとめ」をきちんと理解する必要がある。「めあて」と「まとめ」は「問い」と「答え」の関係にあり、「振り返り」は自分の学びの過程や変容を確認・整理するものといえる。本時の自分の到達点（ゴール）＝めあてにたどり着くためにどのように学んだか・これから学びをどう進めるかを考えれば十分に「振り返り」になると思う。しかし、めあてに対する答えだけであれば「まとめ」になってしまう。「まとめ」＝「振り返り」とならないように、教師が学年に応じた振り返りの視点を与える声掛けを行うなど支援の仕方をさらに考えていく必要がある。

６　おわりに

来年度本校の在籍は、３年･４年各１名の２名となる予定である。これまでも極小規模校ではあったが、１家庭の姉妹のみ、各学年１人しかいない複式となる。教職員数は少なければ２名、多くても３名と考えると学習指導や行事等の運営だけでなく、分掌分担や日々の学校経営をどのように行っていくか課題は山積している。市の計画では、令和７年度に吉見中学校区小中一貫校スタートを予定しているため、計画のとおりに進めば来年度が吉母小学校として最後の１年となる。最後の１年、子供達一人ひとりに合った適切な支援をし、しっかり力を付けて小中一貫校に進めるように努力を続けていかなければと思う。

自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成（３年次）
～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～

阿武町立福賀小学校

１　はじめに

本校は、農業、林業、畜産業が盛んな山間部に位置していて、地域素材に恵まれた環境にある。本年度の児童数は８名で、第１・４学年が欠学年のため、第２・３学年、第５・６学年が複式学級の編成をとっている。日頃は少人数の授業中心だが、年間を通して全校合同授業や福賀ふるさと夢太鼓等、全校で行う授業や活動もたくさんある。コロナ禍が明けた今では、担任の創意工夫を生かしたふるさと学習や、地域の方も授業に参加できる福賀小公開講座等､｢極小規模校だからこそできる｣教育活動が展開されている。

本年度は、上記の研究主題を掲げた取組の最終年次であり、萩地区へき地複式教育研究大会の発表の年でもある。１・２年次の成果と課題を踏まえ､｢極小規模校だからこそできる｣複式授業の創造とその確立をめざしてきた研究の軌跡をここに示す次第である。

２　研究主題

上記の研究主題は、自己表現が苦手であるという、本校児童が長年抱えている課題に対して設定したものである。その課題を教師のもつ創意工夫と行動力を生かして解決するために、上記の副主題を設定した。この研究主題・副主題の下、極小規模校における新たな教育活動の創造を研究の目的とした。

３　研究の内容

⑴　研究の経緯

１年次（令和３年度）『地域素材の教材化』

主にふるさと学習に重点を置き、地域素材の教材化を図るとともに、児童の情操教育の場と位置付け、そこで体験したことを表現力の育成につなげることもねらった。この年度の主な取組は以下のとおりである。

・地元に飛来したアサギマダラの観察、地域おこし協力隊の方による草木染体験　等
・無角和牛とホルスタインを比較しながらの調査活動
・スマート農業の見学と体験及び「福賀の農業のすごいところ」についての討論会
・間伐の見学と間伐材を使った発電についての講話及び発電のモデル実験
・四つ葉サークルによる紙芝居「宇生賀の七不思議」と、それに関わる場所を巡るウォークラリー

本校では、毎年 11 月に学習発表会を開催している。保護者とその親戚、地域の方約 80 名が見に来られるため、ここをふるさと学習の集大成として位置付けている。**図１**は、観察したアサギマダラを主人公に、「はらぺこあおむし」のストーリーに寄せて学習したことを発表するという、担任の創意工夫が生かされたものである。

図１　学習発表会の１コマ

２年次（令和４年度）『全校合同授業における効果的な指導方法の確立』

全校合同授業を計６回行い、そこで講じた工夫や手立て等の効果について検証し、

異学年で授業を行う際の指導方法の確立をめざした。その結果、授業には次の２つのタイプがあり、それぞれの長短所が明らかになった。

①全学年共通のテーマで、全学年同じ学習活動の授業（全校学級活動、全校道徳）
　共通の課題意識をもたせるのは比較的容易で、縦割り班の話合い活動も今までの積み重ねがあるので、授業者はねらいどおりの授業を仕組みやすい。しかし、各学年の主眼の設定が不十分になりがちで、学習の深まりという点で弱さがある。
②全学年共通のテーマで、学年別の学習活動の授業（全校算数科、全校国語科、全校図画工作科、全校音楽科）
　児童の興味を引く共通のテーマの設定に授業者のアイデアが試される。学年に応じた主眼の設定は容易だが、それを達成させる課題設定や手立てにも授業者の力量が問われる。これらがクリアされれば、学習の深まりにつながるものと考える。

⑵　本年度の研究

３年次『極小規模校だからこそできる授業の創造』

１・２年次の研究で見出した成果と課題を精査し、教科等における本校ならではの複式授業の確立をめざした。複式授業といえば「わたり」、「ずらし」、「リーダー学習」等という固定観念を捨て、極小規模校でも「学び合い」、「関わり合い」、「対話」等を仕組んだ授業を創るというものである。

昨年度見出したタイプ２の授業を基に、研究の視点を次のように設定した。

視点１　異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫
極小規模校の複式授業においても、友達との関わりに学ぶ楽しさと有用性を感じさせたい。どの段階で、どのような目的で、どのような関わりをもたせるか。そして、その関わりが効果的であったかどうかを一つ目の視点とする。

視点２　各学年の学習を保障する手立ての工夫
異学年との関わりに情意面の高まりを求め、それを原動力に各学年の学習を確かなものにしたい。そこで、阿武町小中３校共通の育てたい心や力である「きづく」、「きめる」、「かかわる」、「やりぬく」の仕組み方を二つ目の視点とする。

４　具体的な取組　～萩地区へき地複式教育研究大会より～

⑴　算数科　第２学年「かけ算⑵」・第３学年「かけ算の筆算⑴」【指導者　清水 学】

ア　主　眼

２学生は既習事項をもとに６の段の九九の構成を、３年生は被乗数の２３を２０と３に分けて計算する方法を見出す活動を通して、かけ算の仕組みをとらえることができる。

イ　共通のめあて「かけ算を使ってゲーム屋さんのじゅんびをしよう！」

ウ　各学年の学習課題

２年：『６のだんの九九を考えよう』
３年：『２３×３の計算の仕方を考えよう』

エ　研究の視点との関わり

視点１　異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫

みんなでお店屋さんを成功させるという意識を高め、導入では未習の課題について、既知事項をどう活用するかを話し合わせることで、解決の見通しをもつようにする。終末ではそれぞれが身に付けた技能を使って計算を分担する。その際、３学年は２学年にできそうな計算は任せるなど、異学年との関わりを意識させる。

視点２　各学年の学習を保障する手立ての工夫【「やりぬく」】

学習の流れを黒板に示し、各学年で学習が進められるようにする。その際、両学年とも既習事項を生かして自力解決したり、３年生にはバーチャルクラスメイトを使って、かけ算の筆算につながる見方・考え方ができるようしたりする。

オ　授業の実際　***参観者の評価（◇肯定的な意見　◆改善点等）***

導入（合同）		用意する玩具や材料の個数をどのように求めればよいか話し合う。 ***◇めあてが共通でも、学年別の課題によってできることを分けていた。*** ***◆計算できるまでか、筆算ができるまでか、計算を分担させるまでか等、めあてが不明瞭に感じた。***
展開（学年別）		２学年は６の段の九九作りに、３学年はかけ算の２位数×１位数の計算に取り組む。 ***◇各学年で集中して取り組んでいた。*** ***◆かけ算の有用性を実感させるために、バーチャルクラスメイトから、もっとたくさんの意見があるとよかった。***
終末（合同）		ゲーム屋さんで必要な材料の数を、協力して求める。 ***◇２年生が 15＋15＋15 の考え方で、３年生の問題を解いていた。*** ***◆計算問題を分担するとき、２・３年生の学習内容ではなく、自分が担当したいゲームで判断していたので、具体的な指示が欲しかった。***

⑵　国語科　第５学年「固有種が教えてくれること」・第６学年「『鳥獣戯画』を読む」

【指導者　三輪 美咲】

ア　主　眼

文章と資料との関連について話し合う活動を通して、それぞれを結び付けて内容を捉え、読者に伝わりやすくするための表現の工夫について知ることができる。

イ　共通のめあて「筆者のねらいを読み取ろう」

ウ　各学年の学習課題

５年：『写真はなくてもよいのではないか。イラストでもよいのではないか。』

⇒（追加課題）『なぜ、ニホンリスの写真を入れなかったのだろう。』

６年：『なぜ絵を分けて示したのだろう。』

⇒（追加課題）『分けて示した絵を、また１枚につなげて示したのはなぜだろう。』

エ　研究の視点との関わり

視点１　異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫

・めあてとまとめを合同で行うことで、共通点を見付けながら、互いの学びを意識することができるようにする。

・教材が違うものの課題解決の成果を互いに説明し合うことで、筆者の考えが伝わりやすくなる資料や絵の効果をさらに実感できるようにする。

視点２　各学年の学習を保障する手立ての工夫【「きめる」・「かかわる」】

・具体的な課題を keynote やテレビに示すことで、一人ひとりが学習に取り組むこ

とができるようにする。

・課題解決後、子どもの考えを揺さぶる追加課題を準備しておくことで、筆者の意図について考えを深めることができるようにする。

オ　授業の実際　***参観者の評価（◇肯定的な意見　◆改善点等）***

導入（合同）		前時の振り返りを基に行い、それを基に本時の課題について話し合う。 ***◇教師も全体を把握できるので、めあてや振り返りを合同で行うのはよいと思った。*** ***◆終末で提示したポスターを導入にもってくると、展開での気付きがもっと生まれたかもしれない。***
展開（学年別→合同）		学年別の課題に取り組み、自分の考えを発表する。 ***◇ＩＣＴの活用で学習の流れがわかりやすく、一人学びがスムーズに行われていた。教師も今どの段階に取り組んでいるか把握できていた。*** ***◆各学年で考える時間も必要で、合同で行うことで学習時間が半分になったのはもったいない。***
終末（合同）		資料の示し方とその効果について話し合ったことを基にまとめと振り返りを行う。 ***◇違う活動でも学習内容の幅を広げることができ、５年生も新たな発見があったと思う。*** ***◆合同で行うのは、下の学年はプラスになるが、学習している上の学年はプラスになるのだろうか？***

５　成果と課題

当初のねらいどおり、異学年との関わりに、学ぶ楽しさと有用性を感じる姿がそれぞれの授業で見られた。展開の一人学びや学年別の活動に意欲的に取り組んでいたのも、学習の進め方の明示と異学年への意識が相まって効果を表したものと考える。また、第２・３学年の算数科のように、２年生が 15×3 を 15＋15＋15 の考え方で解く等、系統性が明らかな学習内容を組み合わせると、学年横断的な学習も可能であることが分かった。

課題としては、参観者の評価にもあるように、上の学年にとってプラスになるかということが挙げられる。これは、教科等の特性に関係するのではないだろうか。前述したとおり、系統性が明らかな算数科では、上の学年は既習事項の想起として、下の学年は既習後の発展問題として扱える。しかし、今回の国語科のように、説明文の内容に着目させるのか、筆者の技法に着目させるのかに授業を創る難しさがある。授業者は後者をねらいたいところだが、児童は前者に意識があるのが当然で、それを抜きに授業は進められない。今後は教科等の特性を考慮しながら、本研究を深化させる必要がある。

６　おわりに

「極小規模校だからこそできる」を研究の軸として掲げることで、教員の授業づくりに対する意識も変わってきた。また、へき地複式教育の新しい形を提案できたことで、萩地域の本校と同様な学校にもよい刺激になったと思う。このように、校内外で切磋琢磨しながら、極小規模校及び小規模校の教育を充実させることを願っている。

第５３回　山口県へき地・複式教育研究大会

周南市立三丘小学校

研究主題

「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成」
～　対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫　～

１　期　日　　令和５年１１月１７日（金）
２　会　場　　周南市立三丘小学校
３　日　程

13:15　13:45　　14:30　14:40　　15:00　15:20　15:25　　16:40

受付	公開授業	休憩	全体会 開会行事	アトラクション	移動	研究協議 受指導	閉会行事

（１）公開授業（１３：４５～１４：３０）各教室

学年	教科	教材名	指導者	場　所
３・４年	国語	３年　モチモチの木 ４年　ごんぎつね	大久保 美季	３・４年教室 *ﾗｲﾌﾞ配信：ひまわり学級
５・６年	国語	５年　和の文化を受けつぐ ６年　町の幸福論	渡邊　　聡	学　習　室 *ﾗｲﾌﾞ配信：家庭科室

（２）開会行事・全体会（１４：４０～１５：００）体育館
①会長あいさつ　　周南地区小規模校教育振興会　　会　　長　　厚東　和彦
②校長あいさつ　　周南市立三丘小学校　　校　　長　　荒木　裕二
③研究の概要　　周南市立三丘小学校　　研修主任　　中上　理美

（３）アトラクション（１５：００～１５：２０）体育館
人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門-順礼歌の段-」（５・６年児童）

（４）分科会・指導助言（１５：２５～１６：４０）時習ホール・体育館

学年	教科	場所	授業者	指導助言者
３・４年	国語	体育館	大久保 美季	岩国市立錦清流小学校 教頭　片山　博登　様
５・６年	国語	時習ホール	渡邊　　聡	岩国市立由西小学校 教諭　小嶋 三保子　様

（５）閉会行事（各分科会場）

４　大会概要

（１）公開授業

①３・４年　国語科〔　授業者：大久保　美季　〕

３年【想ぞうしたことをつたえよう「モチモチの木」】

単元を通して、「豆太はどのような性格の人物なのか。」という読みの視点で交流をすることで、五場面の豆太の変化から豆太の姿を改めて捉え直し、物語をより深く読む力を身に付けることをねらいとした。学習支援ソフト「ミライシード」のムーブノートの集計機能を活用し、「豆太のおくびょうグラフ」に豆太の臆病度を記録（スタンプ）することで、単元を通して豆太の変化を捉えることができるようにした。

４年【読んで考えたことを伝え合おう「ごんぎつね」】

中心人物ごんと兵十の互いに対する気持ちが、どのように変化してきたかを中心に交流をすることで、人物同士の関わりに着目して、中心人物の気持ちを読み取る力を身に付けることをねらいとした。また、３年同様ムーブノートの集計機能を活用し、毎時間「ごんと兵十の心のきょりグラフ」にごんと兵十の心の距離を記録（スタンプ）することで、単元を通してごんと兵十の変化を捉えることができるようにした。

②５・６年　国語科〔　授業者：渡邊　聡　〕

５年【伝えよう！安田の糸あやつり人形芝居「和の文化を受けつぐ-和菓子をさぐる」】

地域の伝統文化「安田の糸あやつり人形芝居」について調べて伝える活動を通して、複数の資料から伝えたい内容や目的に合わせて必要な情報を見つける力、情報を関係付けて文章にまとめる力を身に付けることをねらいとした。学習支援ソフト「ミライシード」のオクリンクを用いて、単元導入時のイメージマップをカードにし、「安田の糸あやつり人形芝居」について説明する観点や内容、調べる方法を話し合った。

６年【三丘の町の未来をえがこう「町の幸福論 - コミュニティデザインを考える」】

自分たちの住む町の未来について考える活動を通して、集めた情報を目的に合わせて取捨選択したり、情報と情報を関係付けながら自分の考えをまとめたりする力を身に付けることをねらいとした。筆者の論の進め方を生かしたプレゼンテーションが作成できるように、ムーブノートを活用して、「地域住民が主体的に町作りに参加できるか」「未来の三丘の町の姿につながるか」の２つの座標軸を使って、プレゼンテーションに活用する事例について話し合った。

（２）本校の取組発表

昨年度より、様々なつながりに着目し、研究主題を「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成」とし、副主題を「対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫」とした。今年度も研究主題を引き継ぎ、主体的に学習を進めていくリーダー学習を確立し、自己や他者との対話を通して自分の考えを深め合う学習指導を展開していくことを中心課題として、研究を進めている。

①研究（授業づくり）の視点

視点①　既習事項・生活経験・教材等をつなぎ、自分の考えをもつ一人学び

一人学びですべての児童が自分の考えをもって共学びへと臨めるように、課題設定、掲示物や板書、学習方法等を工夫する。一人ではなかなか考えをもてない児童への支援についても、助言や教具など、教師のかかわり方を工夫したり、ペアトークによって児童同士による対話を行ったりすることで、様々なつながりから自分の考えをもつことができるようにする。

視点②　互いの考えを受けとめ、新たな考えへとつないでいく共学び

共学びで対話を活性化させる工夫を行い、互いに認め合い深め合う学びを実現していく。課題を焦点化するとともに、ＩＣＴや思考ツールの効果的な活用により、自分と他者の考えを共有・比較・分析しやすくする。

視点③　自己の学びを再構築し、次時や他教科、生活につなぐまとめや振り返り

授業で得た学びを確かなものにするために、自らの学びを価値付けて自覚したり、共学びによって生まれた新たな考えを整理してまとめたりするなどの場面をつくる。

②リーダー学習の確立

板書学習活動カード

黒板に全校統一したカード（学習活動や学習形態、学習時間）をあらかじめ提示しておくことで、学習リーダーが板書に沿って見通しをもちながら、学習を進めることができる。また、学習リーダーだけでなく学習者全員と学習の流れを共有することができ、フォロワーを育てることにも繋がる。

リーダー学習進行表

学習リーダーに慣れるまでの手助けとして、リーダー学習の基本的な進め方の目安となるカードを用いる。

③基礎学力向上の取組

朝の学習の時間「スキルアップタイム」で行っているフリートーク、朝や帰りの会で朗誦・暗記をしている論語や素読、家庭と連携しながら行っている家庭学習などの工夫により、基礎学力の向上を図っている。また、三丘小学校は「農業」「伝統」「福祉」「熊毛学園」などの分野において、地域と連携した特色ある教育活動を展開している。

（３）アトラクション

「周南市安田の糸あやつり人形芝居保存会（三丘三和会）」の方に指導を受け、本校５・６年の児童が、人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門 - 巡礼歌の段 - 」を披露した。

（４）分科会

①３・４年　国語科（９グループ　４９名）

視点①　既習事項・生活経験・教材等をつなぎ、自分の考えをもつ一人学び

・導入時に教師がゆさぶりをかけることで自分の考えをもつ手立てとなった。また、その際にそれぞれのグラフが既習事項の整理にも役立っていた。

・「豆太のおくびょうグラフ」「ごんと兵十の心のきょりグラフ」にスタンプを置くことで立場がはっきりし、自分の意見が書けていた。言葉で表せない微妙な差を表現することもできた。また、前時までと同じ学習活動のため、これまでのスタンプの位置を比較し、基準に照らし合わせながら、心情の変化を考えることができた。

・スタンプを置く位置があいまいなため、数値化した方がよいという意見もあった。

視点②　互いの考えを受けとめ、新たな考えへとつないでいく共学び

・他の発言をふまえながら自分の意見を言うことができていた。また、対立する意見については、叙述に立ち返って考える姿も見られた。

・教師の問い返しの発問により、疑問を持ったり考えを見直したりし、自分たちの考えが明確になり深まりが見られた。また、そこから児童同士がより交流をすることができていた。

・発表後、「わかりました」と肯定するだけでなく、その発表を聞いてどう思ったの

か、意見が変わったのか共感したのか、賛成、反対なのかを発言することでより深まった話合いになると考える。今後、反応のレパートリーを増やしていきたい。

視点③　自己の学びを再構築し、次時や他教科、生活につなぐまとめや振り返り

・共学びの時点で時間になってしまい、個人でのまとめや振り返りまで行うことができなかったが、自分たちで全体のまとめをしようとしていた。
・３年のめあては、「豆太の何が変わった？」より、「最初の豆太からどのように変わった？」という流れでもよかったかもしれない。

リーダー学習

・黒板係が板書にまとめる際には、出た意見の要点を聞き取り、キーワードを書くことができており、日頃からの積み重ねが見られた。重複した意見は、色を変えたり、線を引いたりするなど工夫してまとめていた。
・児童だけで深めることは難しいため、教師が共学びにしっかりと関われるように大きなずらしをしていくことも取り入れていきたい。

②５・６年　国語科（６グループ　３４名）

視点①　既習事項・生活経験・教材等をつなぎ、自分の考えをもつ一人学び

・５年生は「周南市安田の糸あやつり人形芝居」、６年生は「町のコミュニティデザイン」等、地域素材と教材を結び、「自分たち事」につなげることができていたので、一人学びが充実していた。
・教材文をオクリンクのカードに取り込み、自分の考えを書き込むことで、共学びは大変しやすくなっていたが、一人学びの成果（思考の流れ）が手元（ノート）に残らないことになった。

視点②　互いの考えを受けとめ、新たな考えへとつないでいく共学び

・学習の目的に合ったツールを選択し、ＩＣＴを効果的に活用することで、共学びにおいての話合いが充実する。
・話合いのスキル、姿勢が身に付いている。反対意見を言う場合にも、まずは受け入れること（「Yes→but」法）で、意見を言いやすくなる雰囲気は大切である。
・６年生の授業では、自分や友達の事例提案と筆者の主張を比較しながら、新しい提案を作り出すという活動ができていた。また、自分たちの地域を教材にしていたため、対話がしやすかったと思う。
・５年生の授業では、「なぜその観点で説明したいのか」という自分の思いを表出できていなかった。人形浄瑠璃に対する自分たちの思いと相手意識が、上手く結びついていなかった。

視点③　自己の学びを再構築し、次時や他教科、生活につなぐまとめや振り返り

・単元を通した振り返りカードを使用し、導入で前時の振り返りをすることは、学びのつながりを意識できると思う。振り返りの観点（「み・つ・お」の視点）が明確になっているのは、書きやすく、意識づけもできる。
・「めあて」をもとに、その答えとなる「まとめ」を児童自身で作れているのはよいが、めあてに沿ったまとめになっているかどうかという判断をする教師の出が必要である。

リーダー学習

・板書学習活動カードによる継続的な取組が効果的であり、リーダー学習のスキルが身に付いている。

（５）指導助言

①３・４年　国語科〔　指導者：岩国市立錦清流小学校　教頭　片山　博登　様　〕

本時の授業から

・板書学習活動カードで本時の流れが示してあり、黒板を見れば教師も児童もやることが明確にわかることがよかった。

・個の思考場面を保障すること、手順を示すことの２つが授業の中で行われていたことがよかった。※間接指導でも直接指導でも行えていることがすばらしい。

・直接指導と間接指導をうまく組み合わせられていたので、間接的直接指導で、学習の流れを児童が展開している際に、揺さぶりをかけることができた。

視点①　既習事項・生活経験・教材等をつなぎ、自分の考えをもつ一人学び

・一人学びとは、主体的な課題へのアプローチである。

・学びの動機づけとして、魅力的で明確なゴールが必要。

・多様な思考法の中から、自分でどう考えるかを決められるように、思考方法・手順・形態を教えておくことが重要。

・児童はワークシート等に考えを書き込むことで、自分の考えを一旦視覚化し、思考を整理することができる。

視点②　互いの考えを受けとめ、新たな考えへとつないでいく共学び

・共学びとは、対話による個の思考の再構築である。

・個の思考をもとに教師主導で対話をし、主題に迫り、個の思考の修正、深化を図る。

・リーダー学習により学習者同士で思考の交流と整理を行う。

・１つの意見に集約できなくても、納得解を求めるのも大切。ここでリーダー学習が成立していれば、教師が揺さぶりをかけ、学習を深化させることも可能である。

視点③　自己の学びを再構築し、次時や他教科、生活につなぐまとめや振り返り

・まとめとは、集団の学びを個に落とし込み、各自の学習を成立させることである。

・主体的な深い学びか、納得できているか、次への期待感がもてているかが重要。

・めあてに正対し、個々に普遍的価値を持つまとめを行う。個々の思考をもとに、子どもと教師で確認しながらまとめていく。

・まとめをもとにして、つなげる振り返りの共有を行う。共有したまとめをみんなで価値付け、次へとつながる振り返りとして高め合う。

複式学習における主体的・対話的で深い学びを成立するための学校環境づくり

○学びのスタンダードの習得

・学習規律の徹底と、複式授業における学習ルールの習得⇒学び方の理解が重要。

○学校体制での学び方の標準化

・学習展開の枠組みや教科独自の学び方を作成⇒学年や教師が変わっても、子ども達の自立的な学びが続いていく。

○複式ならではの学びの環境の整備

・複式学習⇒常に他方の学年の学びに接する⇒スパイラルな学びを生み出す

・地域教材すなわち人的・物的・事的環境の活用が重要。

・ＩＣＴの活用⇒複式の弱みを補完し、強みを生かす。

②５・６年　国語科〔　指導者：岩国市立由西小学校　教諭　小嶋　三保子　様　〕

本時の授業から

・めあてを作る時には、より具体的な内容にすると子ども達もわかりやすい。今回は

以前よりわかりやすくなっていた。

・学習の流れや話合いの仕方などを掲示することで、何をどのように取り組むのかが子ども達にわかりやすく示されていた。

・タブレットを使用することで、自分や友達の意見を見える化していたので、意　見交換がしやすかった。以前はタブレットを見ながら自分の意見を言うだけが多かったが、理由を述べたり、質問をしたりするなど友達とのやり取り（話合い）ができるようになっていた。

・一人学びの時間より、話合いの時間を多くとった方がよい。自分の意見を言うだけでなく理由を述べる機会もいるので、グループ内のリーダーの存在も必要である。

・振り返りの段階では、国語の教科書のように具体的な意見を言えるとよい。そのためにもねらいをはっきりさせることが大切である。

複式・国語指導について

○授業作りについて

・授業は学習課題で決まる。それゆえ子ども達が考えられる課題設定が大切である。

・子ども同士が解決できる授業にしたいものである。そのためには、担任の出る場面は学習課題の提示確認・集団解決の時ぐらいがよい。子ども達が考えている時は沈黙になるので、担任が見守ることも大切である。教師３割、児童７割がよいので、本日の授業ではできていたといえる。

・タブレットを使っての思考の見える化は、子どもの考えを深めるのでよい。

○子ども達の力を伸ばすために

・フリートークの時間を設けることは、話す力をつけるだけでなく、人間関係を形成する手段として有効である。

○複式指導について

・リーダー学習を児童がしやすいように、進行のカードを準備しておくことはよい。

・リーダーが言ったことに対して返事をする事は、学習意識を高めるのに有効である。

○間接指導について

・担任が側にいなくても、学習を進めていくためには、機器や道具の活用があると子ども達も取り組みやすくなる。

○話合いの活性化を図るために

・選択肢を作る、順位をつける、空白をつくる等、子ども達の意欲が高まる内容を提示するとよい。

５　おわりに

本校は、「自分の考えを深めることができる児童の育成」めざして、少人数であること、複式学級であることを強みとしてとらえ、ＩＣＴのよさを活用した授業実践を重ねてきました。ここにその成果を発表し、多くの貴重なご意見をいただけたことに感謝申し上げます。完全複式となる来年度から、本校ならではのリーダー学習に磨きをかけて研究主題を追求し続けたいと考えています。

終わりに、山口県教育委員会、周南市教育委員会、下松市教育委員会、光市教育委員会、並びに山口県へき地教育振興会、周南地区小規模校教育振興会、山口県教育会、そして、三丘小学校学校運営協議会、三丘小学校ＰＴＡの皆様の各方面に渡った御理解、御協力、御支援に心よりお礼申し上げます。

あ　と　が　き

令和５年５月には新型コロナウイルス感染症が５類に移行し、それぞれの学校では、多くの方とのふれあい活動が復活、あるいは、工夫改善した形で実施されはじめ、地域連携を核とした学校運営が再び活気を帯びてきました。また、「令和の日本型学校教育」を推進する中で、授業において効果的にＩＣＴを活用する場面も、どの学校においても当たり前のように行われるようになってきています。山口県内では、少子化に伴い、今年度へき地校及び複式学級を設置している学校が１０３校となり、今後も増加する見通しです。そのような背景もあり、複式指導、少人数指導の教育実践への注目も高まっていると感じます。

本年度、県内においては、第53回山口県へき地・複式教育研究発表会を周南市立三丘小学校において開催いたしました。様々なつながりから自分の考えを深めることのできる児童の育成をめざし、授業の各場面で学習内容や他者とのつながりを大切にしながら学び、さらに、次の学習や生活につなげることができるよう工夫されていました。授業では、児童が存分にＩＣＴを活用し、伸び伸びと自己表現する姿を見ることができました。また、県内７地区では、それぞれの地域において、継続的な研究が活発に行われ、その成果が積み上げられてきています。

それらの内容を集約し、令和５年度実践研究紀要を本年度も発行することとなりました。本紀要は、へき地・複式教育に携わる方、これから経験をされる方のみならず、多くの教員に取りまして、授業改善、心の育成の参考となる取組が紹介されています。たくさんの方の授業づくり、学級づくりの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本紀要に原稿をお寄せくださった各地域の皆様、編集に関わってくださった全ての皆様に心から感謝申し上げます。

令和5年度　山口県へき地教育振興会　役員一覧

役　職	氏　　名	所　　属	職　名
会　長	伊　藤　和　貴	山口市役所	市　　長
副会長	厚　東　和　彦	周南市教育委員会	教 育 長
	荒　木　裕　二	周南市立三丘小学校	校　　長
監　　査	兜　坂　弘　子	山口市立さくら小学校	校　　長
	山　本　侑　子	山口市教育委員会	指導主事

〔理 事〕

地　区	氏　　名	所　　属	職　名
岩　国	守　山　敏　晴	岩国市教育委員会	教 育 長
柳　井	星　野　朋　啓	周防大島町教育委員会	教 育 長
周　南	厚　東　和　彦	周南市教育委員会	教 育 長
防　府	藤　本　孝　治	山口市教育委員会	教 育 長
厚　狭	野　口　政　吾	宇部市教育委員会	教 育 長
下　関	磯　部　芳　規	下関市教育委員会	教 育 長
萩	能　野　祐　司	阿武町教育委員会	教 育 長

〔研究委員〕

兜　坂　弘　子	山口市立さくら小学校	校　　長

〔評議員〕

氏　　名	所　　属	職　名
白　神　健　吾	岩国市立河内小学校	校　　長
永　久　　亮	岩国市教育委員会	指導主事
中　村　広　幸	周防大島町立安下庄小学校	校　　長
白　地　　太	周防大島町教育委員会	指導主事
荒　木　裕　二	周南市立三丘小学校	校　　長
野　坂　良　太	周南市教育委員会	指導主事
兜　坂　弘　子	山口市立さくら小学校	校　　長
山　本　侑　子	山口市教育委員会	指導主事
能　美　三枝子	宇部市立吉部小学校	校　　長
岡　﨑　典　子	宇部市教育委員会	指導主事
亥　川　竜太郎	下関市立吉母小学校	校　　長
大　貝　浩　蔵	下関市教育委員会	指導主事
長　岡　正　紀	阿武町立福賀小学校	校　　長
用　殿　正　和	阿武町教育委員会	指導主事

〔事務局〕

西　岡　　尚	（一財）山口県教育会	事務局長
柴　田　眞　弓	（一財）山口県教育会	事 務 局

山口県へき地・複式教育研究大会　表彰のお知らせ

令和５年度は、第５３回山口県へき地・複式教育研究大会を開催する等、へき地・複式教育の充実と進展に尽力されました周南市立三丘小学校に対し、山口県へき地教育振興会会長より表彰状と記念品の楯が贈られました。誠におめでとうございます。

令和５年１１月１７日　第５３回山口県へき地・複式教育研究大会

周南市立三丘小学校のみなさん

令和５年度「へき地・複式教育実践研究紀要」

発　行　日　　令和６年（2024年）２月１日
発　行　者　　山口県へき地教育振興会
　　会　　長　伊藤　和貴（山口市長）
　　編集責任者　荒木　裕二（副会長）
発　行　所　　山口県へき地教育振興会
　　山口市大手町２－18（山口県教育会館内）
　　TEL　083－922－0383
　　FAX　083－922－5768
　　Eメール　ykyouikuk@ruby.ocn.ne.jp
印　刷　所　　株式会社　桜プリント社
　　山口市下小鯖3139－７